50周年に向けての調査・研究

（公社）春日井青年会議所49年の歩み

公益社団法人春日井青年会議所２０１７年度
「とうかい号」推進実行委員会

目　次

１.春日井青年会議所４９年の歩み …… P.01

１９６９⇒１９７８　設立から１０年目までの歩み …… P.02

先輩インタビュー　第１０代　理事長　松尾隆徳先輩 …… P.04

１９７９⇒１９８８　１１年目から２０年目までの歩み …… P.08

先輩インタビュー　第１１代　理事長　清水勲先輩 …… P.10

先輩インタビュー　第１５代　理事長　風岡保広先輩 …… P.14

第４３代　理事長　風岡明憲先輩

１９８９⇒１９９８　２１年目から３０年目までの歩み …… P.18

先輩インタビュー　第２６代　理事長　加藤久仁明先輩 …… P.20

１９９９⇒２００８　３１年目から４０年目までの歩み …… P.24

先輩インタビュー　第３６代　理事長　峠貴斗先輩 …… P.26

２００９⇒２０１７　４１年目から４９年目までの歩み …… P.32

先輩インタビュー　第４４代　理事長　芝田貴之先輩 …… P.34

先輩インタビュー　第４５代　理事長　下田勝彦先輩 …… P.38

２.市民向け対外事業についてのアンケート …… P.44

３.第６次中期ビジョン総括 …… P.45

４.編集後記 …… P.48

１.春日井青年会議所４９年の歩み

1969-1978 設立から　１０年目までの歩み

1969

(故)和田 稔　理事長
JAYCEE の総意でしめせ
日本の姿勢(日本JC)

春日井青年会議所設立総会(４月)
現代の教育討論会
献血
JC 文庫(小･中２２校)

1970

(故)児山 隈治郎　理事長
豊かな心 厳しい自覚
貫け社会の正義(日本JC)

市民会議の開催
市長との対話(～現在)
JC 家族会の開催(～現在)
LIA 勉強会

1971

鈴木 幸雄　理事長
豊かな心 厳しい自覚
築こうアジアの連帯感(日本JC)

市内各地の婦人会との対話
市内小中学校作文コンクール
勤労青少年表彰

1972

高木 修　理事長
考える 行動する
若い力が未来をひらく(日本JC)

勤労青少年との集い
JC デー統一事業の開始
新聞記者との対話(～現在)

1973

今西 実　理事長
老人と創ろう　築こう
豊かな未来　(日本JC)

創立5周年記念事業
市民チャリティ音楽会
若人の祭典
グリーンベルト植樹

1974

堀尾 明　理事長
模索する英知　挑戦する勇気
若さで担え日本の未来(日本JC)

子供会とJCの集い（おいだせムダゴン）
クリーン春日井運動
交通遺児招待(ヨーロッパ曲技団)

1975

(故)西尾 聰　理事長
厳しい自覚と豊かな心
知ろう創ろう クリーン春日井

第1回JC スクール開校
わんぱく広場
カンガルークラブ結成

1976

谷井 外二　理事長
連帯の心で見直そう
郷土文化と クリーン春日井

20 万人市民文化の集い
(春日井まつりの礎)
史蹟清掃大キャンペーン
第2 回JC スクール

1977

(故)林 龍男　理事長
郷土に誇りと自覚
たかめよう自治意識
伸そうクリーン春日井

春日井まつり実行委員会発足
春日井まつりへの参画
(JC デー統一事業を吸収)

1978

松尾 隆徳　理事長
明日の春日井創りだす
示せ若さの十周年

創立10 周年記念事業
愛知ブロック会員大会主管
植樹5ヵ年計画(JCの森構想)
春日井市民の誓い記念碑(勇助山公園)

先輩インタビュー

第10代理事長　松尾　隆徳　先輩

一口メモ

平成29年8月8日、東洋電機株式会社本社にお伺いさせて頂き、第10代理事長「松尾隆徳先輩」のお話をお伺いさせて頂きました。春日井青年会議所が誕生した当時のこと、春日井まつり始まりの経緯、当時の行政との関わり方…。我々現役にとって、今後、運動展開をする上で知っていなくてはならない貴重なお話を伺うことができました。

聞き手：河村勇祐副理事長（以下「河村」）、川村吉秀副理事長、伊藤宏委員長（以下「伊藤」）

河　　村：松尾先輩、本日は貴重なお時間を頂戴しまして本当にありがとうございます。早速ですが、春日井青年会議所設立当時のお話からご教示頂けますでしょうか。

松尾先輩：有志が声を上げて賛同者を集め、設立総会をやって春日井市にJCを創りましょうと。それで集まったメンバーと必要書類を添え、尚且つ、日本JCの主義主張を尊重し順守してやっていきたいということで日本JCに申請をし、設立を認可してもらい認承証を頂きました。その際の認承証伝達式が俗に言う「チャーターナイト」と言います。ここからがJCのスタートになります。二村光清さんと私の二人が最後にチャーターメンバーに加わったのちに認承証伝達式を迎えました。当時の設立メンバーで私までがチャーターメンバーで理事長をやったメンバーになるわけです。

設立の時に中部経済新聞の春日井地区担当記者の服部さんという方からいろいろと助言を頂いたりしたから、当時のことで言えば一番詳しい存在かもしれないですね。私が入会して半年後ほどにチャーターナイトをやる為に、毎月1、2回集まって会議をしていて、その度に服部さんも参加してくれて、こうしたら良い、ああしたら良いと助言してくれていたから、一度服部さんに会って話を伺うことも非常に良いのではないかと思いますよ。

初代理事長に和田稔さんがなられて、チャーターナイトの実行委員長は松浦清さん。松浦さんは人は良いけど口がとんでもなく悪かったですね（笑）。我々もケチョンケチョンに怒られながらやってましたね（笑）。勝川地区の大ボスでしたからね。

当時のことをよく知っている人は鈴木幸雄さん、高木修さん、谷井外二さん、今西實さんですかね。高木さんは弁護士だから少し角度の違った形でJCを眺めてみえてたと思います。非常に貴重な存在でしたね。それから今西さんもまじめに取り組んでいらっしゃった。堀尾さんも。そういったことでは、みんなまじめに取り組んでましたね。谷井さんは職種がらJCの印刷物は全部面倒見られていたので、そういう意味では記録に残っている範疇のJCについては一番よく知っている方ではありますね。私は当時一番若く25歳でした。チャーターメンバーのほとんどが私よりだいぶ上の方ばかりだったから、随分とある意味では痛められたし、指導も受けてたし、面白かったですけどね。今もそうだけれども春日井を創るということでみんな燃えていましたよ。

河　　村：設立の際の50名はどのようにして集まったのでしょうか？

松尾先輩：直接は知りませんが聞いたところでは、中部経済新聞の服部さんがメンバー構成は色々な業種で集まっ

た方が良いということで人選にもお力添えを頂いていたという話は聞いております。30代の人で自薦他薦はあったのだけれども、集まって創られていったということでしょうね。毎回毎回、議事法の勉強をしたり、色々なことをしてましたね。それと当時も勉強のあと、お酒も飲んでいましたが、そこまで遊んでいなかったと思います(笑)。みんなよく勉強してました。

例えば、青年の船ですね。鈴木幸雄さんの時は「日本JC青年の船」と言ってて、まだ「とうかい号」ではない時代でした。それで「とうかい号」の第1船は愛知ブロックで出したんですよ。2船目から「とうかい号」という名前に変わって東海地区でやることになったんですよ。私は第2船の時に乗ったのが最初でした。愛知青年の船に乗ったんですよ。当然のことながら当初は社会開発と指導力開発が中心で、どちらかというと指導力開発ということで自己研鑽的な事業が非常に多かったです。徐々に社会開発ということで青少年を対象とした事柄に乗り出していきました。

今もそうだと思いますけど、色々な催し物に家族を対象にやっていましたよね。総会にもなるべく家族を呼ぶということをやっていましたね。一度、忘年会に私一人だけが女房を連れていって、みんなから私がからかわれたこともありましたね（笑)。楽しかったですけどね。

私の大きな記憶では、林龍男さんが非常に社会性の鋭い人で、今、皆さんとつながりがあるかどうかわかりませんが、交通安全対策ということで、今は誰もご存じないかと思うけど、幼稚園の「カンガルークラブ」を必死になって幼稚園を駆けずり回って、春日井カンガルークラブを創り上げた推進者だったんですよ。それから「市民の誓い」ってあるでしょ。これを創り上げたのも林さんが推進者だったんですよね。「市民の誓い」はたまたま春日井市内が機運にもなってきた時期でもあったのだけど、JCが「市民の誓い」というものを創りましょうと呼び掛けをして、市内のいろいろな団体が集まって「市民の誓い」を創るための委員会を作って、その中でできたものが現在の「市民の誓い」となったんですよ。その中で、「一．勤労を尊び豊かな暮らしを目指そう」、これはJCが経済会を代表する立場で、しっかりと勤労を尊んでまじめな世の中、まじめに働く、そういうまちにしていかなくてはいけないということで強力に推薦してやっていったという経緯があります。そしてJCがこの運動の第一線でいかなければならないということで、それからJCはあらゆる会合で綱領を唱和するように「市民の誓い」も唱和しよう、ということでいろいろな行事のたびに唱和を繰り返しました。それがきっかけで、市も色々な行事の時に「市民の誓い」を浸透させるように唱和活動を色々やってくれました。「市民の誓い」の実現には陰で春日井JCが十分な役割を果たしたのです。

もう一つは今も続いている「春日井まつり」です。前身は各地区のお祭りがあって、その後、商工会議所が中心となって「商工祭」という名前でやっておったんですよ。その時にさらに全市にわたるようなお祭りにしようとJCが考えたんです。その中心になったのも林さんで、その時に相談を持ちかけたのが春日井の教育界の親分で伊藤さんという方で、市民全体を巻き込まないといけないよ、と言われ、まずはお祭りというのは昔からその地域の文化、それは大抵お宮さんにつながっていると。だからそれぞれの市内のお宮さんへ連綿とつながっているお祭りの集大成とする形にすることがひとつ。それから、これから若い世代がやっていくのだから子ども、少年少女が参加するようにならなくてはいけないよと。だから昔からの神社につながる民族、芸能をふまえたお祭り。それから、これからの若い生徒、児童、この両方をドッキングさせることで、市内の昔からの土着の方と市外からみえた新しい市民との融和ができてひとつになるでしょう。そのためにはパレードをやろうと。そういうことで方向が定まる前に伊藤さんと話し合いをして、方向が定まってから、春日井市にいろいろな申し出をして、春日井市も、そうか、市内全域のお祭りに広げよう、ということでJCのアイデアを全面的に採用しようということで、実行委員会を作って毎回毎回勉強をして、それで今の基本的な春日井まつりを創り上げたのです。それで、最初のうちはJCが企画から進行から運営までやっていた、それが色んな意味で受け入れられ、徐々に役所がやるように仕向けていった、それの推進役も林さんだったんですよ。

河　　村：よく地域に根付いたお祭りになりましたね。

松尾先輩：だからその時に伊藤先生は春日井市の教育界の親分でもあり、且つ地域の郷土史の研究者でもあったので、そういう意味でも文化関係の団体での親分でもあられたので、各お宮さんのそれぞれの地域の伝統芸能の皆さん方からも、春日井祭りができて演舞することができる、あるいは装束を身に着けて子どもも行列に参加できて、こんなに出番が広くあることは他にはない、ということでみんな賛成してくれました。他方では、幼稚園の子どもたちもブラスバンドなど楽しい、楽しい、って。今でもそうだと思いますけど、子どもにつられて親御さんも出てきますよね。だから、人を集めるには子どもだということもありましてね。それには春日井の文化、伝統、歴史も踏まえないといけないということで、「道風行列」というような形になった。最初から「道風行列」ということではなかったけれども、だんだんと道風に焦点を合わせた行列になってきたんです。そういう意味でも私は春日井JCの中興の祖であるのはやはり林龍男さんだなと思います。

私が愛知ブロック会長になったのはまったく降って湧いたような話でしたね。それはこの尾張の地からブロック会長を出すという順番があるわけですよ。それで、あるところが出す予定だったけれども、色んなことがあってクチャクチャになってしまって、それで何とか春日井から誰かおらんかという話がきて、それでたまたま私が理事長をやってから2年後くらいかな、35歳で理事長をやって39歳の時にブロック会長をやりましたから。暇だからやらんかってな話で（笑)。それでどうにもな

木さんあたりからじゃないかな、生まれも育ちも春日井という地場の人っていうのは。

河　　村：今は、言い過ぎかもしれないですが、春日井市が言っていることをやってあげてるっていうような少し天狗になっているメンバーも中には居るのが現状でして、そのあたりの恩恵を噛みしめながら過去の行政との関わりをもう一度原点で立ち返って50周年に伝えていきたいなと思いました。

松尾先輩：そういう意味でも山があり谷があるということですけども、あまりギラギラしているばかりではいけませんね。そのうち叩かれるよ。

河　　村：そうですね。皆さんが居て団体としてやらさせて頂いているという謙虚な気持ちをもって頑張っていきます。

らん、クチャクチャで締め切りが目の前だと、それならばわかりました、やりましょう、ということでやりました。それまでブロックの役員もやったことないし、ブロックには理事長会に出ているだけで。その昔にJC青年の船の研修委員会の副委員長はやったけどそれだけで、それ以来ブロックには一切関係することが無くて、だから最初は戸惑いがありましたね。歴代は委員長やったり副会長やったりした人から出てくるはずなのに、アイツは誰だ、ってな感じでしたね。そんな経緯でしたが、みんなに支えてもらってできたんで良かったですけどね。

河　　村：ようやく50年ということで市民の方にも広まっている中、当初、発足して、いきなり行政、市役所と、JCというブランドがまだまだ無かった時代どのような感じでしたでしょうか？

松尾先輩：最初から割り合い行政は温かく迎え入れてくれたと思いますね。当時の鈴木市長は非常に物分かりが良い人で、まだ商工会議所の青年部も無かったし、他にこういう青年の集まりの場が少なかったっていうこともありましたからね。だから非常にJCを大事に、むしろ育ててくれたという面もありますね。何かにつけJCが言っていることは取り入れてもらえたし、役所のいろいろな事柄にJCも参加させてもらえてましたね。言うなれば青年の代表として春日井市もいろんな会議の場にJCを呼んでくれていた。そういう意味でも松浦さんの存在も大きかったですね。地域のボスとして。語弊があるかもしれないけど、実はね、初代の理事長の和田さんも春日井の人ではなかったんですよね。児山さんもどちらかというと春日井の人ではなかったですし、鈴木さんは春日井系が強かったかなと思います。最初のうちはやはりね、市内の商工業の若手の集まりということで私もそうだけれども外部からきている会社というのが多かったんですよね。地付きの会社よりは。だからそういう意味では鈴

松尾先輩：やはり行政がJCを信頼してくれてたから、市民の誓いや春日井まつりなどもJCの意向を受け入れてくれたということですね。その延長で姉妹都市ケローナの件でもJCの意向を最終的には受け入れてくれた。結果から言うと役所が用意してた事柄とは全く違う方向になったわけですからね。

河　　村：役所は、よく若いJCメンバーに重役を与えてくださったことが凄いなと。

松尾先輩：それはJCの気持ちとそれを受け入れてくれた当時の商工会議所会頭の川越さんの英断を鈴木市長が受け入れてくれたってことは長年の真面目さがあってしてくれたということですね。

当時は商工会議所からは随分と怒られましたけどね。いろんな意味でJCは一生懸命やっているけど遊んでばかりおるじゃないか！と（笑）。まぁちょっと真面目に仕事をちゃんとやりなさい！って。あの時は遊んでいる人も多かったですからね（笑）。バブルの時代、イケイケドンドンな雰囲気だったから。追い風がどんどん吹いていた時代だから現状維持くらいの事は遊んでいても出来ていた時代でしたね。今はアゲンストだから現状維持でも必死にあらゆることをやっていかなくてはいけなくなったけれども。あの当時はお客さんから次々と仕事が来ていた時代だから。

伊　　藤：理事長をやられた後も長く在籍されていて15周年の時にワイワイカーニバルの前身の「ふれあい緑道フェスティバル」が始まっているんですが、当初、青年会議所としては自己啓発事業が多い時代からだんだんまちづくりに変わっていかれたかと思いますが、1年目から15年目くらいにかけて、どのようなかたちで自己啓発からまちづくりにシフトしていったのでしょうか。

松尾先輩：まちづくりをやらなきゃいかん、そのためにはやはり教育をちゃんとしないかん、教育のためには小さい子どものうちからいわゆる世の中にためにというか、あるいは社会性、そういったことを子どもに対して、世の中に奉仕をするということかな、お休みの日にみんなで掃除をしましょうとか、まちをきれいにしましょうとか、まちの行事には参加しましょうとか、そういうところから子どもを対象とした事業をいろいろと JC としてやってきたわけですよね。それが結果として今のワイワイカーニバルにつながっておるということですね。ただ、私の頃の 10 年目くらいまでは、とにかく子どもを対象にやって親もそこに来てくれたら世の中に対する影響力が出るのではないかということでお祭りとかカンガルークラブとかであったのだけれども、そのあとから徐々に子どもにより焦点を絞った形で、それはむしろ私よりあとの方が具体的に皆さんがやられていきましたね。それが今のワイワイカーニバルにつながっていったと思うんだけどね。JC の狙いは子どもだと、子どもに訴えていかなければいけないと思いますね。

河　　村：過去の先輩たちの事業や内容などを今と見比べるとスケールの大きさを感じるとともに、色々な後世に残るものを創り上げてこられています。当時どういった想いで活動されていましたか？

松尾先輩：それは結果大きくなったことで、すごいことだなぁと思うけれども、その時我々は大それた考えでやってはいませんでした。これが良いだろうと思ってやっていることで、それが後々こうしようああしようって考えなかったといえば嘘になるけど、それはぼやっと描いた、こうなったら良いなぁくらいのところで、入口のところをコツコツやっとったということで、たまたま後の皆さんがつないでくれただけで、最初の人たちが良かったからということではないと思いますよ。後につないでくれた人たちが立派なだけだと思いますよ。我々がやったことでも消えていることだってあるし、それは発想が悪かっただけのことです。

河　　村：当時の皆様と我々若い現役メンバーと比べるとここが当時と違っていたとか、燃え滾る血がもっとあったんだとか何か気付くところがあればご指導いただけたら嬉しいなと思いますが、何かありますか？

松尾先輩：今の人もちゃんと真面目にやってるんじゃないですか（笑）。

ただ言えることは、色々なことをやっていくと幅が広がり深さも広がる。それだけ時間を充てることになることで、皆さん方が非常に時間を取られてることは感じますね。だから、そのうちでも良いから、捨てることもやっていかないといかんのじゃないかなぁと思います。ものすごく時間を取られていらっしゃると思うんですよね。こんなことは無しでも良いよと、例えば形を作ろうがためにね、膨大な資料を揃えるけど、資料作りが仕事ではない。会社でも言えることだけどね。色々な資料を作るけど活用されなければ意味が無い。取捨選択をしてポイントのあることをしっかりやって余分なことは削っていくことも必要じゃないかな。そうしないと本筋を忘れてしまうことになるよね。目的はなんなのか、そこをよく見てやる。切ることは切る。それは JC に限らず言えることだけど必要だと思います。時間を無駄にせずやっていってほしいですね。

今は無いと思いますけど、JC をやって仕事がおかしくなるのは話になりません。厳しい時に仕事と JC とどっちを取るといった時に迷わず仕事を取らないといけません。仕事を通して社会に奉仕するのだから、堂々と辞めるのも方法だし休会もよし、また出席しながらでも時間を決めてこの時間は仕事に没頭すると決める、とか皆さんで共有していかないといけない。もう一つは、JC に託けて遊んでいてはいけない。例えば、今日は JC に託けて遊んだという自覚があるのであれば次の日は 3 倍働いて取り戻そうと。人よりも早く遊びを覚えて、人より早く遊びの愚かさを悟って足を洗うということが JC の良さだと。いつまでも遊びをやっているのはバカだと。人よりも早く遊んで人よりの早く遊びから足を洗って次の課題に足を突っ込むのが JC をやった良さじゃないのかなと私は思います。

一　　同：今日はありがとうございました。

1979-1988 11年目から　20年目までの歩み

1979

清水 勲　理事長
創造の精神かえりみて
翔け春日井明日のために

ケローナ親善視察団

国際子供の集い

LD 道場開催

1980

出口 好郎　理事長
厳しい自覚と使命感
創造しよう郷土の未来

ケローナ親善訪問団来春

ビジョン討論会
（語ろう日本と春日井JCの未来）

婦人の集い

JCの森

勇助山公園清掃

MG研修会

1981

（故）鈴木 正實　理事長
厳しい自覚と思いやり
めざそう心ふれあう 郷土づくり

ケローナ訪問（姉妹JC締結）

文科会シンポジウム

第1回福祉のつどい参画（～現在）

1982

長谷川 正和　理事長
見直そうJCの心
愛知に示そう春日井の心

愛知ブロック会長選出

社団法人格取得

教育講座

帝王学勉強会

能力開発講座

1983

風岡 保広　理事長
創立15周年
地域からひろげよう明るい社会

創立15周年記念事業

25万人ふれあい緑道フェスティバル
（わいわいカーニバルの礎）

1984

倉知 孝典　理事長
JCの心を地域にひろげよう
豊かな社会を創るため

かすがい子供フェスティバル

行政改革問題アンケート

1985

伊藤 幹夫　理事長
めざせ地域の活性化
しめせ若さと行動力

春日井産業文化の現況調査

企業訪問

三世代交流ゲートボール大会（～ 88年）

1986

竹内 良一　理事長
みつめよう春日井
考えようまちづくり
今こそおこせ青年の風

青少年教育問題調査

名古屋世界会議参加

1987

岡島 章　理事長
活力ある春日井
魅力ある21世紀
やりとげよう「まちづくり」

まちづくりサマーフォーラム開催

ニューLIA 勉強会

わいわいカーニバル（～現在）

1988

木野瀬 吉孝　理事長
翔びたとう20歳の空
地域に広げようJCの夢

創立20周年記念事業

スカイアートフェスティバル

20周年記念コンサート（荻野目洋子）

まちづくり論文コンペ

先輩インタビュー

第11代理事長　清水　勲 先輩

一口メモ

平成29年8月7日、ホテルプラザ勝川にて、第11代理事長　清水勲先輩のお話をお伺いさせて頂きました。清水先輩は、わたしたちのために当時の活動を記した資料を作成してくださり、その資料をもとにご説明くださいました。また、当時使用されていたという手帳をお持ち頂き、当時の様子を詳細にお話しくださいました。ケローナ市姉妹提携の件、カンガルークラブなど、行政を巻き込んだスケールの大きいお話に心震える気持ちになりました。

聞き手：河村勇祐副理事長（以下「河村」）、伊藤宏委員長（以下、「伊藤」）、中村祐介副委員長、加藤佑輝委員

清水先輩：1972年のスローガンは、「創始の精神かえりみて　翔け春日井明日のために」でした。はじめて私が専務理事というのを作ったのです。僕の秘書みたいな感じでお願いしようと思った。直前は松尾さんね。10代目の理事長。その下に副理事長、丹羽孝充さんは丹羽秀樹くんのお父さんね。筒井宣政さんは、東海メディカルプロダクツという会社で名古屋大学に寄付もしているいます。自分の企業のPRスピーチで日本代表になってモナコまでいってますね。園田副理事長。藤井真さんは明和工業さんね。鈴木さんは町内会の方で饅頭屋さんです。

1979年、ケローナにて
清水先輩とケンジルバンクケローナJC理事長（当時）

振り返ると、春日井は明日のためにどうあるべきかというテーマでした。大きく3つに分けていて、まずは青少年の育成。ケローナからはじめましょうか。1979年6月4日、姉妹都市について春日井市長、秘書課が、春日井市が姉妹都市を探してるという話があった、春日井市が探してると。8月20日、市からの呼びかけで中国へ行きました。この訪中にはロータリークラブとかは行ってないのね。青年会議所が一人だけ入ってる。これはどういうことかというと、前の年に私たちが姉妹都市、姉妹都市と言っていてどっかとやるぞという雰囲気はあったわけ。でうちも姉妹JC考えよかと。このメンバーで話し合ったときに、清水さんどう思ってるのということで、日本の国は考え方も狭く、自分たちの子どもの時代を考えると、もっと大きくものを考えられる人財を育てていかないといかん。それにはカナダかオーストラリアと姉妹提携できないかと。どっか探してこいと。いうことで、探してくれたのが、長瀬君と石黒さん。日本JCだとかいろいろ聞いてくれて、カナダのケローナがありますよと探してくれた。では、とりあえず、行ってみようかと！　JCだから、同じJC同志だから。こんなところで話してても しょうがないから。いう考え方で、行ってみて、JC同士がつながればいいかなと思って。市は関係ないところでね。6月30日から7月7日まで行ってきた。そのメンバーはこの写真のこれです。これが行ったJCメンバーです。私が理事長で松尾さんが直前ね。あと、筒井君が国際の委員長ね。ということで向こうへ行ったんです。

河　　村：すごい写真ですね。キレイに残ってますね。

清水先輩：これ差し上げます。

河　　村：よろしいですか。ありがとうございます。

清水先輩：流れをわかってないとわからないでしょう。その人たちにも聞いてもらえばわかる。この写真は、カナダのケンジルバンクという理事長の家ね。ものすごい身長高いでしょ。JCの羽織をもらったんだよ。そういうのを頂いた。今でも家にあると思う。向こうの市長だとか、商工会議所の会頭だとかがお会いしたいと言ってきた。彼が連れて歩いたわけ。市長と会頭を。向こうの狙いは日本と姉妹都市ができないかと言ってきたわけ。その言葉を伝えるけれども、よかったら日本へ来て、私のところへ泊めてあげるから、市も商工会議所も連れてくるから。と、要するに直に話をしてほしいと。市長も一人で決めるわけでもないので。市議会であったりね。おたくもそうでしょうと。議会にかけてね。JCなら持ち帰ってみんなに聞けばいいけど、私らだけではどうにもならないからね。

市長と会頭さんからワインを1ダースもらったんだけど、飲んでしまおうかと（笑）、でもお礼いわないかんで2本だけ持って帰ろうと、あと全部飲んでしまおうと、そんな思い出が残ってるね（笑）。7月16日に市長と会頭へ帰国報告をしに行った。その時に日本へ来

インタビュー後、ケローナを訪問されケンジルバンク氏と再会された

てくださいと言っておきましたと言っておいたのね。8月20日は市からの呼びかけね、前あったでしょう。私がケローナにそういう提案をしたからここにのっとるわけ。普通はライオンズとかロータリーとかもいなきゃいかんでしょう。これは姉妹都市をするところを回っていこうかと。大同市、石家荘市をまわってきたの。でも向こうも係長クラスだった対応なのでなかなかいい返事はもらえなかったのね。（中国との姉妹都市提携が難航する中）そんなときにこのケローナの話があったからね。その明くる年ですね、私の家に市長が来て泊まった。

河　　村：自宅にいらっしゃるなんてすごいですね。

清水先輩：泊めてあげると言ったからね。何人かで来たから、泊めるところも分けたんだわね。このときに春日井市役所と商工会議所へ連れてったんだわ。

河　　村：今では考えられない1年の動きですね。

清水先輩：翌年はこんな感じでつなげたという感じね。徐々に具体性が出てきたわけだ。だから1979年、1980年には青少年育成の部分をやってきた。私の子どもたちはケローナに行ってるからね。加藤佑輝くんも2年間行ってるでしょう。子どもたちが行くにはいろいろ調べたんだ。ロイ田中っていう方がコーディネータしてくれたわけ。この人話せないけど、いろんな人を介してセッティングなどをしたんだ。向こうは理事長として話したんだけど、東海メディカルの筒井さんが英語を話せるから翻訳してくれたんだわ。彼に色んなことをしてもらった。石黒さんと長瀬さん筒井さんは英語が話せたね。この人は大学の先生で建築のことをやってたのかな。筒井さんが話ができるし、あっちでは親分だったね。こんな感じでカナダの件はいいですか。

河　　村：ありがとうございます。この年は私が生まれた年です。こんなふうに先輩方が動かれていたとは思わなかったです。感慨深いですね。

清水先輩：青少年の育成として、今後色んな子ども達が育って、色んな交流をすることによって、明日のために育成ができるんじゃ無いかって。次は幼児教育かな。春日井カンガルークラブ連絡協議会設立創会。3月8日にやってるね。これは幼稚園を対象にして、警察と組んで交通安全をした。そういうものを設立して、ここでカンガルークラブとした。これは政治の関係が強い丹羽隆光さんがやったと思う。

次は、自分達もJCとして勉強しなければいけないということで、指導力委員会をやった。これは5月18日にJCのスクールをやった。日本JCからリーダーシップの委員長を連れてきてやってもらった。5月24日に春日井市教育センターで指導力委員会をやったね。僕らの議事録は全部手書きで、手書きが慣れてるんだわ。他には、とうかい号の見送りにも行ったし、中国、カナダにも行ったね。じゃがいもクラブはゴルフ、清掃も鈴木くんがやったね。JCで春日井まつりの件だとか、愛知ブロック大会を3000名。那覇で2000名、JC麻雀大会、愛知ブロックゴルフ大会、これらはよそとの繋がりの部分であったよと。

河　　村：この時は、LOMメンバーは何人くらいだったんでしょうか。

清水先輩：70人くらいかな。最後に面白い話があって、市の方は姉妹都市をする時に、僕と商工会議所の会頭と市長で、訪中後、4者協議を行った。市長さんはどうして最初に中国を選ばれたかというと、戦争に行ってるんですよ。2人とも。大道市、石家荘市、泰元っていう都市は、市長も会頭も昔いたところなんですよ。配属された場所だったんだよ。市長も会頭も、おそらく良い印象

があったんだろうね。そこで交流をしたいとなったんです。ここは僕の想像だけどね。だけど、中国の提携が難航して、じゃあケローナと姉妹都市を市議会に出そうかということになって、そのときに商工会議所の会頭と市長と市議会議長と私の４人で、市の応接間で話し合ったけど、この時は市が優先だから最初自分は話さずにいたんだよ。いろいろの話の中で、行政がどういう判断をするのか見てた時に、行政は人口で判断をしたんだよ。例えば私たちの流通業でいくと、ダイエーだとかユニーだとかは物凄く大きいけど、大きい中で何か勉強できるのではないかという考えてなんだな。当日カナダ全体で2000万人の人口でケローナは今は10万くらいだけど、昔は５万くらいだったんだわ。BC州で１番大きいのはバンクーバー。人口は５万くらいしかなくて、BCの中で人口としては３番目くらいなんだよ。日本は高度経済成長で高蔵寺ニュータウンだけで10万人。そしてこっちでは10万人。合わせてこの当時20万人くらいだった。行政の立場からすると、なんでこんな人口の少ないとこと姉妹都市になるんだと。中国行けば50万人～100万だからね。でも市長たちが、自分達は長く生きることもできないから、若い人達が決めれば良いじゃないかということになったんです。まさに明日のために。清水さん達若い人がケローナと言うんだから、行政としてケローナにしようと。

河　　村：10年目、11年目あたりのJCは、行政にとってどんな団体なんだ？っていう時期ではなかったんでしょうか？

清水先輩：そんなことないよ。JCというブランドはあったよ。今と同じようにね。

河　　村：そうなんですね。本日は、こんなに沢山の資料を頂きありがとうございました。

清水先輩：1979年の手帳から拾い出したんだよ。僕この時に5JCのゴルフコンペをやった時に春日井でホールインワンやってるんだよ。４番目にね。こんなことも書いてあるくらい手帳は便利だね。

河　　村：清水先輩、この手帳を写真にとってもいいですか。当時の手帳は貴重ですね。

伊　　藤：ここには歴史が詰まっていますね。

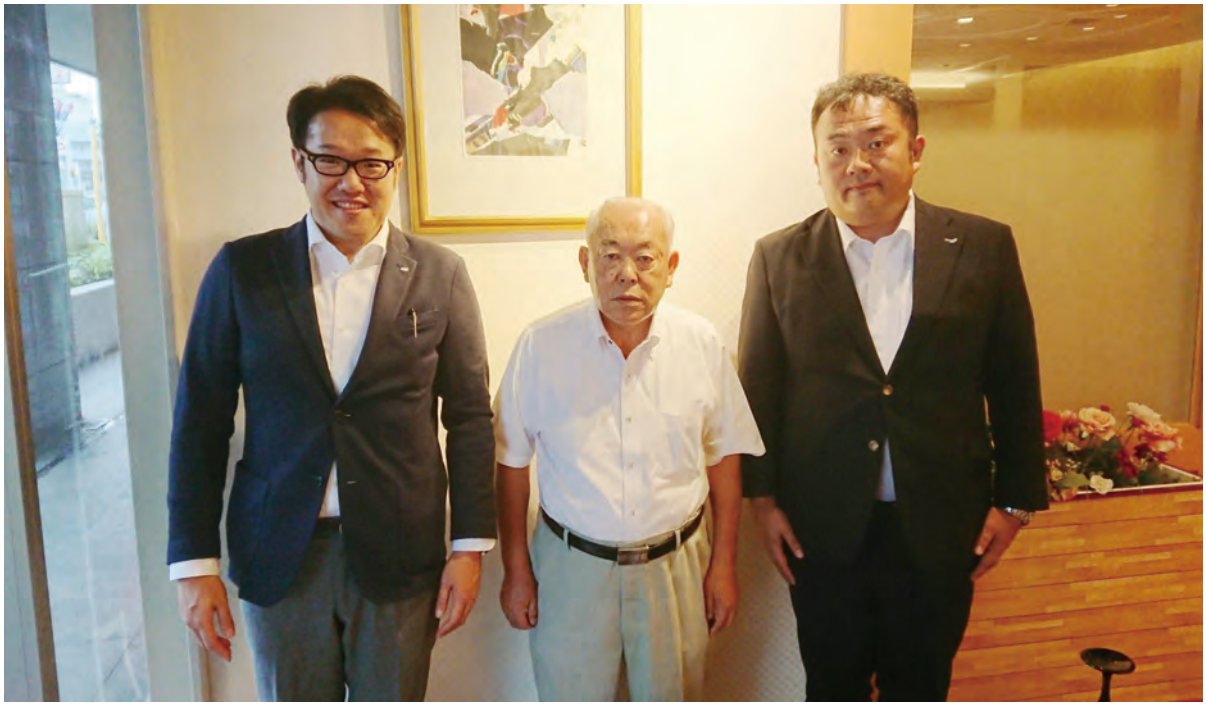
清水先輩：あなた達もこういう風に持ってると思うけど、これ僕のメモなんだよね。色分けして分かりやすくしたよ。それでその頻度も確認できるから。これがなかったら覚えてないしね。

河　　村：今は携帯に書いてしまうので重みが違いますね。

清水先輩：私たちの時代はそういう時代だからね。今の人について行けないね。現代化しすぎて。

伊　　藤：今は携帯使って動員とかしますが、当時は会社に電話しなければいけませんし、今とはやり方が違いますよね。

一　　同：今日は本当にありがとうございました。



先輩インタビュー

第15代理事長　風岡　保広　先輩
第43代理事長　風岡　明憲　先輩

一口メモ

平成29年8月9日、昌和工業株式会社にて、第15代理事長　風岡保広先輩、第43代理事長　風岡明憲先輩のお話をお伺いさせて頂きました。JCもある時代と言われるこの時代だからこそ、JC課せられた役割について大きなヒントとなるお話しをして頂きました。

聞き手：河村勇祐副理事長（以下「河村」）、伊藤宏委員長（以下、「伊藤」）、中村祐介副委員長（以下「中村」）

河　　村：本日は、よろしくお願いします。早速ですが、まずは15周年当時のお話をお聞かせください。

明憲先輩：私の思い出は今でも鮮明に覚えているんだけど15周年のときの記念事業の緑道フェスティバルのことですね。あれに僕も行きまして、母親と一緒にね。鮮明に覚えてるのがチューインガムのふくらまし大会というのがあって、一定の大きさ膨らますと認定書がもらえるみたいなのがあってね、その時記録まで行かなかったけど、その時、理事長の息子が来てるみたいだからって話になってね、はんこ押してもらったの（笑）で、その認定書に父親の名前がかいてあるからJCの父親がこんなことやってるんだってことを初めて知ったんだよね。その時の思い出はものすごいありますね。

河　　村：親子でそういった話はされるんですか。

保広先輩：しないしない。まったくしないね。

明憲先輩：だって家にいなかったからね。だからその思い出は大きかったかな。

河　　村：ふれあい緑道フェスティバルは今のわいわいカーニバルの前身になると思うのですが、まちづくりの第一歩といいますか春日井市民の子どもたちを巻き込んで今の春日井JCに残っている一番の古参の事業となると思いますがその発端になったきっかけ、なぜふれあい緑道をやろうと思った経緯をお聞かせ願えますでしょうか。

保広先輩：15周年ということで周年事業をやりたいということになったのだよね。なにがいいかってことになって子どもから親まで巻き込んでやろうとなったんだよね。それなら落合公園から緑道があるからそれを利用してなにかやったらどうかってなったんだよ。遊歩道が整備されたのがそのころだったからね。遊歩道は落合公園から朝宮公園まで続いてるところね。今は二子山の方まで続いてるのかな。そういった発端でやろうとなったのだけどだんだん事業としては大きくなっていって、じゃああれもやろう、これもやろうってなって当初は落合公園の中だけでやろうという話だったけども話が大きくなっていって三ツ又公園かな、そこまで使ってやろうって話になった。結局そこら一帯を使ってやったのが第1回になったんだよね。だからはじめから規模は大きかったかな。やりはじめたらその当時の鈴木市長が、青年会議所がやる前に行政がやらないかんだろって。行政が先にやらなければいけなかったことを青年会議所が先にやったからそれが今に繋がっているということだね。

河　　村：市長がそういう言い方をされるということは市もそういったことが必要と考えていたのでしょうか。

保広先輩：いろいろやらなかんって考えていただろうね。市民を巻き込むことを。今はいろいろあるじゃないです

か。特に春日井まつりかな、あれなんかすごいですよね。あれもJCが始まりなんだけどね。松尾さんかな。それがずっと続いてるわけだよね。現況変わってないね、当時とやっていることは。

明憲先輩：昔は総合体育館もわいわいカーニバルの会場だったよね。今でもわいわいカーニバルの主催は春日井市と春日井青年会議所になってるよね。共催かな。今でも名前が残っているのは春日井青年会議所が立ち上げたからってことだよね。

河　　村：初めて行われたことだと思いますがこういったことが大変だったとか困ったこととかありましたか。

明憲先輩：多分、理事長まで上がってこないよね。大変だったのは実行委員長とかだろうね(笑)。

保広先輩：実施されたのが5月だったかな、ちょうど雨が降るかどうか心配で空ばかり見てた覚えがあるね。朝も雨が降ってて10時ぐらいのこれから始まるって時にだんだん雨が上がってそれだけは鮮明に覚えている。ほっとしたね。あとはたくさんの人が来てくれた覚えはあるね。その当時の発表で2万人ぐらいだったかな。

河　　村：50周年というのは人生100年といっても折り返しとなりますが50周年はなにがあっても成功させるべきですよね。

明憲先輩：それはやっぱ半世紀というのはもちろん重いよね。今まで周年を周年で積み重ねてきたのはまずはひとつの目標とする50年を迎えるというところだと思うし大事ですよね。

河　　村：理事長の年と委員長の年はどちらが印象深いものでしょうか。

明憲先輩：印象っていろんな印象があるんだけど、単純にひとつのものを創り上げるというところではやっぱり委員長のほうじゃないかな。それこそ今の話ではないけれどもこれは俺がやった事業だとか写真みてそうなるんだよね、いつまで経っても。そういった部分では委員長のほうがやりがいはあるね。理事長は責任者だからね。運営責任者だから、責任感だよね。それはもちろんそれを創り上げてくれた委員会メンバーみんなが大事で貴重だし、もちろん理事やらなければそんな経験もできないし、経験したことも大きいけども印象としては一つひとつの事業に関しては思い入れは強いよね。委員長のときは楽しかったよ。なんでもできると言ったら語弊はあるけどやりたいことはやれたし。来年行政も周年だよね。

中　　村：はい。周年は行政とリンクしています。

明憲先輩：そうだよね。40周年のとき行政は65周年だよね。次が75周年だね。だから行政も75周年という想いでやられるのでそういったところでうまいことリンクできると面白いよね。それでできたのが40周年の僕らの事業だったんだよね。ギネスに挑戦して八幡小学校グラウンドに一面の紙引いてやったんだよね。

河　　村：ふれあい緑道で、市民1万5000人から2万人は来られたと思うのですが、今、私達が1万人を超える事業を「やれ」と言われても想像がつきません。春日井市民会館を満席にするだけでも、現役メンバーは、ハーハー言いながらやるんです。我々、現役メンバーからすると、突拍子も無いたじろいてしまう、歌手の荻野目洋子さんをお呼びして予算を1300万円掛けたとか。

保広先輩：意見はいろいろあったとは思うけど、それでも「やろうか」という事で、一致団結してたと思うけどね。

明憲先輩：多分、時代背景にもよると思うんですよ。昔は、JCしか無い時代で、今は、JCもある時代、いろいろ同じ様な、趣旨は違えど事業を行う団体がある訳じゃないですか。でも、その当時は、JCしか無い時代だったので、「JCが事を起こさなくてはならない」という使命感が強かったんじゃないですか。やっぱり。どうなんですか。

保広先輩：使命感はあったよ。「全体を巻き込んでやるような事業をやろう」という事でやってた覚えはあるよ。

明憲先輩：その当時、こんな大きな事はないから、それこそ市内の小学校に言えば「どんな事が起きるんだろう」とたくさん興味を持ってくると思うんだよね。

河　　村：その使命感というのが、ちょっと私達は希薄になってしまっているのかもしれません。

明憲先輩：希薄になっていると言うか、僕から言いますとJCもある時代だから、今の方が大変で、「じゃあ、JCとして何をやって行くのか」というのをより鮮明にしなくては、人も来ないだろうし。

河　　村：おっしゃる通りです。今、ビジョンが鮮明じゃなくて、今やっている動きとすれば、私達よりも各分野においてプロフェッショナルの人達はたくさんいるんで

す。JC が出来るのは、その分野と分野をくっつけて事業をやる事が多いのですけれども、それでは無いと思うので、僕達も「これで良いのかな」と思いながら。というのが、二の足を踏んでいると思ったところです。

保広先輩：今、事業を起こすのも難しいのかな。

河　　村：「これをやりたい」となってしまうと、既に専門の団体が居ますので。

明憲先輩：要するに「JC だから出来る事」は、いっぱいあると思うので、それを追求していくべきなのかな。この間のアカデミーで講演させてもらったときにも話しましたが、僕らはイベント屋では無いので、イベント打って人来てもらって「あー良かった」では無い。そこへ来た人達が「今後何をして行かなくてはならないのか」を気付く事が出来るそんな事業をするのが常に大事。意識変革団体なんだよ。自分達が人づくりに参画するという事が大事。その後、「私達、こうして行く」という、気付きが得られる。そういう事業がやって行きたいと、私は思う。

伊　　藤：話は変わりますが、春日井市について問題点はどのような点と考えられていますか。

明憲先輩：中核都市として、春日井市は人口も多いわけです。だけど「どこから来られたんですか。」と聞かれて、「名古屋」というわけでしょ。「春日井」と言われて、「え、どこですか」春日井に誇りあるの。どうなの。と、話もあるじゃないですか。だからもっと春日井を知ってもらいたい。本当に知ってもらう事が大事。人が集まるだけなら、さいたまスーパーアリーナみたいなのを春日井にドーンと造ってやればいい。イベント、コンサートやればいい。人も集まるし、経済としてもね。だけど、青年会議所として大きな事を後押しすることも JC だし、働き掛けるのも大事だし、イベントも大事だけれども、未来に繋がっていく話をしていく。一宮と春日井の大きな違い分かるかな。

伊　　藤：なんでしょう…。

明憲先輩：春日井は圧倒的にホテルが無いんですよ。宿泊施設が無い。

伊　　藤：ホテルありますね、一宮駅前。確かに。

明憲先輩：圧倒的に無いんです。春日井って。なかなか人が集まらない。

保広先輩：春日井の観光地って何があると思います？

河　　村：私、不動産業をやらせて頂いているのですが、それが本当に無いと感じましたので、1 年、2 年前に国道 19 号の内津の辺りにスノーボードの練習場を企業とタッグ組んで纏めた時がありまして、それで、内津峠という殺風景な所が日本各地から多くのオリンピック選手にお越しいただいてます。

保広先輩：そうすると、人が集まるとホテルだな。たくさん必要になってくる。出来てくると思うわね。今は剣道大会がある時は、泊まらないといけないからね。施設が必要だけれども、恒常的にずっと人が集まる様な観光地というのが何かあるのかな。

河　　村：それは無いと思います。

明憲先輩：春日井の観光の HP みるとトンネルだけですね(笑)。愛岐トンネルね。あれが歴史遺産としてあるけどもね。

保広先輩：何があるかっていったらなんにもないよね。松河戸の道風会館か、あと内々神社かな、あれも古くて有名らしいんだけどもあれもよそから見にくるかっていったらなかなか来ないでしょう。春日井っていうのは観光の少ないまちなんだよね。無理に観光地にするかこれから作っていくかだよね。スケールの大きいものを考えていかないかん。それが一つの呼び水になるんじゃないかな。そういったのを JC が行政へ、こうしたらどうだ。とかああしたらどうだという意見をだしていかなきゃいかんね。

明憲先輩：スタジアムとかホールとか馬鹿でっかいのつくったらいい。5 万人収容のスーパーアリーナとかさ。そうするとそこを交通整備しないかん。春日井駅からモノレール引っ張ったりして。

保広先輩：だからこれからの JC の活動としては観光地、春日井の弱いところをねひとつ立て直しをしてやったらどうかという提案をして。

明憲先輩：青年会議所の一案としては動かないから市民が総意だよってとこに JC としてもっていく。市民がこう思っているんだよってところをね。

河　　村：このままでいいのか。中途半端な春日井でいいのか。ってことを行政に訴えかけていくということですね。

明憲先輩：それが今後のJCの役割だと思うよ。

保広先輩：私もそう思うよ。ビジョンを繋げるってことで提案されていくといいんではないかと思います。

明憲先輩：大きなものができれば必然的にその周りにホテルもそうだし出来てくるからね。

保広先輩：ぜひ50周年でドーンと大きいものを。行政もそれをみて素晴らしいものだなこれならできそうだな、って思えば行政も動いていくからね。

河　　村：例えばそういった事業が出来たときに、我々現役メンバーが136名で来年やらせていただきますが、実際動けるのは半分ぐらいだと思います。15周年やられたときも、人がたくさん必要だったと思いますがそのときも実働はどれくらいだったのでしょうか。

保広先輩：通常は動けるのは半分ぐらいだろうね。ただ大きな事業になるとほとんどの人が参加してくれたよ。役目を振ってね。

河　　村：それは必然的にでしょうか。

保広先輩：みんながやらないかんなって必然的になったね。だからそういう心配はしなくていいと思う。

河　　村：使命感で委員長、副委員長がやっていれば自然についてくると。

保広先輩：そうだね。ついてくるよ。

河　　村：今の日本の会頭が豪傑になれと豪傑をつくろうといっているわけなのですがわれわれメンバーが豪傑にならなくてはいけないんですが風岡先輩のときは自然と豪傑になられていたと思うのですが。

明憲先輩：いやいや、やらざるを得なかったんだよね（笑）過去を学ぶことってすごく大事で遡れば遡るほどすごい事業大きい事業っていっぱいあるし、実は過去をみてみれば背景目的なんておんなじようなこと書いてあるんだよね。このまちをどうしていかなきゃいけないかってことなんだよね。その中でヒントを拾っていってこの50周年という節目で青年会議所の一つの答えを出すことこの先未来への道筋をつくることそこがこの50周年大事だと思います。まずは中期ビジョン長期ビジョンをしっかりと読みこまないと50周年は作れないと思う。

一　　同：貴重なお時間ありがとうございました。

1989-1998 ２１年目から ３０年目までの歩み

1989

原科 弥寿彦　理事長
今こそ見直せ人間づくり
つくろう地域の新時代

地域活性化ディスカッション

消費税勉強会

奥田瑛ニコンサート

1990

高木 英一　理事長
情熱き心 豊かな発想
めざせわれらのライブポリス

ちびっ子相撲（～現在）
（わんぱく相撲春日井場所の礎）

尾張5 市長サミット

1991

市原 和久　理事長
まちに夢と活力を
創ろう 素敵なライブポリス

サマーパフォーム91

パネルディスカッション
「共に語ろう愛する地球の物語」

1992

安藤 広和　理事長
人と心のまちづくり
夢見る明日のライブポリス

ディベート討論会

国際交流例会

自転車レース

フリーマーケットin JC

1993

高柳 通　理事長
明日の地域の　夢づくり
心のふるさと　ライブポリス

公開講演会 松下　政経塾上甲晃氏

創立25周年記念　事業「緑と地球の音楽会」
「大学対抗バンド　コンテスト」

自転車カーニバル

1994

加藤 久仁明　理事長
語ろう未来　起こせ行動
夢ある我ら　の明日へ向かって

「人と地球とJC」　対話集会

公開例会ケント　ギルバート氏

足ながPウォーク　への協力（～現在）

1995

野田 芳雄　理事長
流れる汗 築く心
伝えよう我らの熱い思い

阪神大震災支援ボランティア

手話を学ぶ例会

環境キャンプ少年自然の家（～現在）

わんぱく相撲横綱誕生（国技館）

サイクルロードレースin 潮見坂

1996

（故）武藤 淳弘　理事長
明るい地域 思いやる心
めざそう意識改革

インターネット公開勉強会

いじめ問題公開勉強会

震災関連事業

鐘の鳴る丘ふれあい

コミュニケーションキャンプ

1997

丹羽 直樹　理事長
個人の自覚が組織を変える
起こせ行動 描こう未来の夢

インターネットホームページ開設

福井重油ボランティア

モナコに於いての愛知万博支援

ケローナJC 来春

経営研修勉強会

伊勢修養団研修（例会）

1998

松田 修　理事長
心が通うまちづくり
広げようネットワーク
実現しよう未来の夢

創立30周年記念事業

心のふれあいフェスタ（丸山浩路氏）

創立30周年記念シンポジウム

「新しい地域社会に向けて」
～みんなで創ろう未来のまち～

先輩インタビュー

第26代理事長　加藤　久仁明 先輩

一口メモ

平成 29 年 8 月 7 日、王春工業株式会社にお伺いさせて頂き、第 26 代理事長　加藤久仁明先輩にお話をお伺いさせて頂きました。22 歳で青年会議所に入会され、20 代でブロックの委員長を務められ、その後も休むことなく役を受け続けられた加藤先輩は、まさに春日井青年会議所の生き字引と言うべき方です。18 年にも及ぶ在籍を超え、春日井青年会議所の黎明期から発展期の貴重なお話を伺うことができました。

同　席：平原慎太郎先輩
聞き手：河村勇祐副理事長（以下「河村」）、伊藤宏委員長（以下、「伊藤」）、中村祐介副委員長（以下「中村」）、加藤佑輝委員（以下「加藤」）

伊　　藤：加藤先輩が在籍が非常に長くいらっしゃて、特に春日井青年会議所の歴史の中で一番肝となっていくところ、15 周年でわいわいカーニバルの礎となるふれあい緑道がフェスティバルが始まり 20 周年、25 周年の一番油の乗り切った時代を見ていらっしゃるというところで、その時代の変化についてをお伺いさせて頂ければ幸いです。

加藤先輩：では、わいわいカーニバルの話から始めましょう。まずは 15 周年でなぜワイバルが始まったかという話ね。もともとこれは春日井まつり自体が、春日井 JC が 5 周年の時にやりだしたもので、それがある程度定着をして、そして市の方がほとんどやるようになって、次に何かやろうという話の中で、12、13 年目ぐらいからそんな話が出始めました。風岡さんがその時の理事長ですが、だいたい 13 代目の鈴木正實さんの辺りから、何か子ども向けの事業は始めようかという話になりました。

河　　村：15 周年の前から動きがあったんですね。

加藤先輩：15 代の理事長風岡さん、その補佐をやったのが鈴木さんと鈴木さんの専務理事をやってた伊藤誠士さん。その 2 人が家が近いことから何かやらないけないねということで、それで 13、14、15 年目に何をやろうと。やっぱり子どもだよねと。青年会議所は自分達の子ども達がある程度の年齢になってきて子どもに楽しませることが必要ということで、緑道がもともとあったので、あそこを利用して何かやろうよというのが最初の発想でした。一番考えたのが落合公園から三ツ又公園までで何か事業をやろうということで、市の方に申請してやったのがふれあい緑道フェスティバル、今のわいわいカーニバル。市の方は最初はあんまり協力的では無かったんだけど、15 周年にやったら大盛況で市が乗り込んできて、わいわいカーニバルという名前をつけて、やるのはこちらの青年会議所で、お金は少しは市が出すという形の中でそれが永遠に続きだした。それが 15 周年の記念事業でした。これがわいわいカーニバルの初めです。

河　　村：それまでは子ども向けの事業はやっていなかったのですか。

加藤先輩：青少年自体はあったけどあんまりで、それよりも社会的なボランティアをしようという時期でした。10 ～ 12、13 年の時期は日本青年会議所からの命で、日本 JC が社団法人を取るから各 LOM で社団法人を取

りなさいということで、どうやって取ったらいいのかを考えていました。松尾さんがブロック会長だった時、各LOMを廻る際に社団法人のメリット・デメリットを聞きにいったんです。社団を取ることによって地域の地位が上がるからというのが答えでした。表向きは、社団法人なら市が青年会議所に対してこういう委員会に出て意見を教えて欲しいと。そういうことが出来るからってことで進めたんです。確かにそれをやりだしてから、理事長や専務理事が市の委員会へ出ていく機会が多くなった。これは社団法人を取ったおかげだと思う。その10～15周年の黎明期の間は社団法人を取ることに尽力して、子どもよりも青年会議所の社会的な地位をどうしていくかに尽力していました。わいわいカーニバルをやったら成功して、新聞などにも取り上げられたかな。

20周年になった時に木野瀬さんがやったんだけど、20周年の年は大変な年で昭和天皇がなくなった年なんです。1年前からだいたい20周年の企画、事業だったりパーティーや式典をやる予定だったんだけど、みんな取り止める所が多かったんですよ。私が20周年の副委員長で、委員長が市原さんで、事業計画から何から順調に進んでいって、当日は7月か8月にロイヤルホテルでやったんだけど、朝から報道関係から電話がかかりっぱなしでそれの対応が大変だった。なんでやるんだ。不謹慎じゃないかと。1年以上前から決まっていた事だということで決行しました。20歳の成人式を1年前から企画していたにも関わらず何でやめなければいけないのかと。すべて報道関係は無視して決行しました。その時のブロック会長が鬼頭完次さんだったかな。東海4県ブロックを連れてきて挨拶をするということで、その調整が大変だった覚えがあります。

河　　村：20周年のイベントもありましたね。

伊　　藤：荻野目洋子コンサートですね。

平原先輩：これ僕行きましたよ。荻野目洋子。

河　　村：1300万円くらいの予算が組まれてますね。今なら200万円でも私たち、ビクビクしています。

加藤先輩：バブルの絶頂期だからね。だんだんだんだん膨れ上がっていくんだわ。アポとって宣伝してるからチケットはともかく売らないかん。1枚いくらだったかな。

河　　村：1枚3000円。4000枚。凄い数ですね。

加藤先輩：あとは、幼稚園で子ども達の記念になる航空写真をとってたかな。セスナで撮影する事業だったかな。

河　　村：ここで加藤先輩はおいくつだったんですか。

加藤先輩：ここで30歳かな。

河　　村：入会何年目ですか。

加藤先輩：8年目かな。ここからずっと副委員長だったかな。やっぱり周年の副委員長は大変だったね。議案とかも委員長が作るわけではないですし。議案が通りそうも無いなと思ったら、自分が理事会に行って、オブザーバーの立場から強引にもっていってたかな（笑）。

河　　村：その時は1委員長の2副委員長でしたか。

加　　藤：この時は1委員長、1副委員長だったかな。幹事を作ったことがあるんだよ。

河　　村：幹事はどんなポジションでしたか。

加藤先輩：これは副委員長の下で会場設営係でしたね。ブロックの形を取り入れた形の、委員長、副委員長、みき幹事というものをLOMに持ってきた形で、会場の設定だとか、委員会への連絡、出席をやってました。副委員長2人はやりにくいということで、みき幹事を作った時期もあったんですが、定着せずに1年か2年で無くなった制度です。20周年まではそんなとこかな。

次に、中長期計画といものを考え始めて、それが伊藤幹夫理事長の時かな。その時に春日井青年会議所はどう進んでいくべきなのかを考え始め、中期計画、長期計画を考え始めました。3年の間には何をするか、10年の間で何をやっていこうか考えた際の集大成がこのライブポリスという名前になったと。

20周年でライブポリスという名前が出て、それから5年位使われているんですかね。構想でね。その前が中長期計画で特別委員会もあった年もあった。木野瀬さんの20周年の時に大体まちづくりに戻していこうという話になったんです。

長期計画は今、春日井市っていうのはニュータウンだとかそういうのがあって若い世代がいるけれど、21世紀に入ってからは、年寄りが増えて、税制の方も働いていない人が増えるから、市の財政も厳しくなるよという統計を出したりもして、そのためにはどうしていくべきなのか。街を活性化するためには青年会議所は何をやっていくかをこの辺りでやり出した。

河　　村：かなり具体的ですね。

加藤先輩：荻野目で始まって奥田瑛二コンサートとかね。高木英一理事長は5JC市長サミットをやったね。これは半分鵜飼市長の方から出たもので、うちがお膳立てする形で5JCに話をして進めたかな。

23年目は市原和久理事長。市原さんは同期ってこともあって一緒にやったかな。最終期なライブポリスの集大成が安藤広和理事長、そのときに副理事長だった。この時は室長制を作ったね。

河　　村：春日井にもあったんですね。

加藤先輩：高柳通君と加藤久仁明が副理事長で、自分達の下に室長を作って、自分たちは理事長のフォローをするということで、後は全て室長に任せた格好でした。これは1年だけでしたね。25周年の前だから、ここからある程度考えていこうと。今までを振り返って次の大きな年に備えようという時期でした。

河　　村：周年の記念事業はどうでしたか。

加藤先輩：25周年は大きな事業はライブポリスがここでまとめだね。今までの10年間やってきた時の発表と子ども達向けっていう。だいたい今でもそうかもしれないけど、青年会議所は家族を突っ込みたく無いんだよね。特に奥さんを。何でかわかる。

河　　村：わからないです。

加藤先輩：自分達が遊んでるのがバレるから（笑）。家族会みたいなことをやると、バレると。自分の年に内部充実を考えたのかな。まずは内部規定を変えて、会員拡大の考え方も変えて、家族だとかを巻き込んで大人数にしていくことも考えた。意外と基本資料には書いてあるんだけど、青年会議所ってのは3つに分けれる性格があって、青年会議所に入っていて本当に社会に対するボランティアをしたいやつ。みんな同じくらいの年齢で楽しいからっていうやつ。それからどっちつかずの3つがある。どっちつかずの人を連れてくためにはどうしたらいいのか。要するに100人いたら1/3の人間。真面目な奴は真面目な人間がついてくる。遊び的なことを考えるやつは遊びのブレインが付いてくる。残りは、事業によって出席が違う。それをどうやって巻き込むのはどうしたらいいか。これが自分の理事長の基本資料には書いてある。その中で考えた時に、私がやり出すと、かたい形になったと思う。委員長の想いでやろうということでやった事業がJCIの前会頭を岡山から呼んだ事業かな。その当日、4月26日に中華航空が小牧の辺りに落ちて、その対応でばたばただった。秋にケントギルバートを呼んで、社会開発か青少年の委員会に100万の予算をつけた。特別委員会費としてね。会場を抑えたけど、講師が決まらず、ケントギルバートに決まった。内部充実は何やったっていうと、家族の花火を桟敷で作ることにきめた。シートをはってJCのメンバーだけをそこに集めた。

河　　村：納涼まつりですか。今もやってますね。

加藤先輩：1番いいところにシートを敷いてやりだした。そこに家族を集めて楽しんだ。クリスマス家族会、謝恩会も始めたんじゃ無いかな。卒業式が済んでから何も無いのも悲しいから始めた。ライオンズやロータリーはやってるから真似してやり出した。ただ金がないからグリーンパレスで安くやった。今の手帳の中でJC10訓だとかをブロックからひろって、基本資料とかも全て作ったね。

河　　村：本当に長い間JCやられてたと思うんですが、先ほどもスリープもなかったと伺ったんですが、秘訣みたいなものがあるでしょうか。長いマラソンを走るようで。私も30からやっているのですけど、私の2倍くらいやられていますよね。

加藤先輩：私の場合は入会、アカデミー出向して、3年目で松尾さんがブロックの会長やられたこともあってブロックの事務局をやったから、愛知県中に知り合いはいて、どこ行ってもやりやすくはあった。その後渉外の副委員長、委員長を20代のうちに済ませて、ブロックの委員長も。たんたんたんと20代で全部やってるからね。未だにブロックでは自分がブロックの委員長やった最年少だと聞いてるけど。今でも聞かれることあるよ。ロータリーとかの集まりで。

河　　村：ブロックの委員長までやられてたら、そのあとはどうされてましたか。

加藤先輩：その後は副委員長をずっとやってたね。20周年でも副委員長。その前の年が総務かなんかの副委員長。私はフロアでいたのは2回だけで、理事長になる前の25周年はフロア。後は1年目かな。あとは全部役がついてた。LOMでやることなかったらブロックとは他の所に行ってただろうね。役を与えられてたからよかったんだろうね。あいつうるさいでフロアにしとったらもっとうるさいからね（笑）。だいぶ春日井のメンバーは煙たがってたから（笑）。歳は下だけど歴が長くて全部知ってて、副理事長や委員長なんて関係なく言ってたし。春日井の全ての役をやったね。

一　　同：本日は、ありがとうございました。

３１年目から　４０年目までの歩み

1999

野村 浩司　理事長
ともに語ろう未来のために
ともに動こう明日のために

指導力研修「平常心プログラム」

書のまち春日井
～毛筆手紙文コンクール～

「父性の復権」教育問題講演会

2000

今川 昇　理事長
走り出そう一人ひとりが
変革のチャンス 育てよう
豊かな心と思いやり

第33回愛知ブロック会員大会主管

文化のバリアフリー

手作りカヌー大会

MM塾

指導力強化塾

わくわくワークランド

2001

前川 寿之　理事長
感動のまちづくり
魅力ある人づくり 心を一つに
21世紀を歩きはじめよう

みんなでなろう地域の先生

わいわいカーニバル
「出会い・ふれあい・心の輪」

遊・YOU・ゆめキャンプ

2002

下形 泰寛　理事長
広げようネットワーク
伝えよう夢と希望と感動を

第一回COOL PERFORMANCE MEETING

遊YOU 夢キャンプ

わんぱく相撲大会

2003

大原 泰昭　理事長
つくろう 愛　あふれる社会
魅力あふれ　るまち

創立35周年記念　事業

みつけよう大切　なもの「愛」探検タイ

一次救命処置　(BLS)

春日井祭り参加　第二回CPM

ハートフルプラン　作成

2004

峠 貴斗　理事長
人がつくる　ひとをつくる
未来をみつ　めたまちづくり

新人会員30名　獲得目標達成

100%出席目標　例会の達成

ハートフルキャ　ンプ(少年自然の家)

春日井青年会議所ビ　ジネスネットワーク冊子発行

子どもニコニコ　フェスティバル

クールパフォー　マンスミーティング

スーパーお江戸　ゲーム

環境運動にスポット　をあてた活動を行う

2005

高橋 勝之　理事長
みつけよう 一人ひとりの意識改革
はぐくもう 地域とともにJCの輪

地球環境運動一春日井まつりを通じて
住みよいまちづくり事業を行なう

青少年育成一懐かしい遊びを大人から
子供に伝え、遊ぶ楽しさを知る

子どもニコニコフェスティバル一地域の
先生をまねき小学生対象に講座を開く

第32回ＪＣ青年の船「とうかい号」
事務局主管

2006

佐藤 千秋　理事長
心で語ろう ひとづくり
情熱で創ろう 夢あるまちづくり

JC 新聞発行一地域の人たちに
春日井青年会議所の活動を紹介

行政、他団体との懇親会

わくわくサマーキャンプ

クール・パフォ一マンス・ミーティング

環境事業
「キャンドルナイト・イン・KASUGAI」

2007

林和義　理事長
夢をかたちに かたちを現実に
めざそう心豊かなまちづくり

わいわいカーニバル

わんぱく相撲

チャレンジキャンプ

ネオ・クール・パフォーマンス

環境事業
「キャンドルナイト・イン・KASUGAI」

2008

長谷川 弘尚　理事長
羽ばたこう 未来へ向けて
めざそう 愛あふれるまちづくり

40 周年記念式典の開催

中期ビジョンの策定
～魅力ある春日井の実現に向けて～

わいわいカーニバルの開催

わんぱく相撲の開催

春日井っ子サマーウォークの開催

春日井まつり 野外大揮毫大会の開催

先輩インタビュー

第36代理事長　峠　貴斗　先輩

一口メモ

平成 29 年 9 月 5 日、大和エネルフ株式会社にお伺いさせて頂き、第 36 代理事長　峠貴斗先輩のお話をお伺いさせて頂きました。峠先輩時代の例会出席率は、80%、90% が当たり前という時代でした。積極的でない LOM メンバーにスイッチをいれる秘訣をお話し頂き、現役メンバーが抱える出席率向上への課題解決に向けての大きなヒントを頂きました。また、第 32 回 JC 青年の船「とうかい号」の本部長を務められた峠先輩のお話は、わたしたち「とうかい号」支援室のメンバーにとっては本当に興味深いお話となりました。

聞き手:河村勇祐副理事長（以下「河村」）、伊藤宏委員長（以下「伊藤」）、川島友樹副委員長、中村祐介副委員長、大島淳副委員長、松原悠太委員、齊藤洋大副委員長（「とうかい号」特別委員会）、東季実子副委員長（輝く人財育成委員会）

河　村：本日は、よろしくお願いします。

峠先輩：JC 入会するきっかけですが、僕は色々なことをやっています。最近すごく思うことですが、本人自身の背景、例えば、皆さんは自分をどのようにして買っていますか。今 JC にいるから、JC と言えますが、もし仕事だけやっていたら、どのようにして買っていますか。弁護士は別として。僕はそれが JC の極めるところだと思う。

河　村：といいますと？

峠先輩：今から 40 歳までは、ある程度、仕事半分やりながら、JC 活動をしていますが、40 歳過ぎて JC 終わったら、ピタッと電話が掛かってこなくなります。後は、今までのいつもアカデミーで今度しゃべることは気まぐれでしゃべるのですが、結局今これに恵まれて JC に入らしてもらって、自分自身で仕事をされてみえる方もいますが、リスクがすごくかかります。そのリスクを、ここにいることのリスクです。仕事どうするの、どうするのですかね、仕事。目的を明確にすると、人との関わりを深めることは、JC 入ることだと思います。忘れてはいけない事は、あなたたちは、あと 10 年すれば春日井を牛耳ることになります。自然と皆が頼りにしてしまうのですね。だから今、一生懸命に真の友達を作っていかないと、僕はそういう意味で会員拡大をしたり、様々な役をやらせて頂いたのですが、活力ある人と人との関わりをキーワードにしていますが、とにかく活力ある人間をどれだけ繋ぐかのことを、メンバーにも中心になってもらって、やってもらった。しかし、どんなにお偉い様でも卒業します。

その後は、誰がやりますか。わくわくしないですか。東さんは、委員長をやるみたいですね。人に投資している訳です、魅力をすごく感じている訳です。自分達が交流することで、必ずその人が化ける、ダイヤモンドの原石は、ダイヤモンドによってのみ磨けるように、人は人によってのみ磨かれます。ここにいる人達が相手を磨きに行っている訳です。当然自分も磨かれている訳です。

河　村：そういうことですね。

峠先輩：本人の我が強いと、砕けてしまうので、人事は懇

親会だと思っています。会議で偉そうなことを言っている、正論を言う、偉そうに語る、でも懇親会に行くと居場所が無い。先ほどまで仲間だと思っていた人間が、それぞれ居心地の良い場所に行ってしまうので、あれ自分の居場所どのなのかな、やはり正論だけではいけないな、人事は懇親会で決まると思いますし、人間関係は懇親会のお酒の席でできると思っています。しかし、僕はお酒が好きな訳ではありません。昔、あるJCの先輩に質問したことがありました。その先輩は北海道帯広の副会頭でありましたが、JCで懇親会に行きますと必ずビールが出ます、私は本当に困るのですが、どうしたら良いですかと聞きました。その問いに、先輩は明確に答えてくれました。お酒は飲みたくないと言いますが、飲めと言われます。車で来たし、どうしようかなと困ります。どうしますか。その先輩は、黙って従え、組織に従えと言いました。君がトップになったら変えろ。それまでは黙って従え。会社でも、社長の指示に社員は皆従います。

河　村：深いですね。やりきっていらっしゃる方の言葉ですね。

峠先輩：僕は、社員のおかげで色々外に出させてもらっています。でも社会では、僕はもしかしたらフロアーメンバーで、もしかしたら中間管理職でトップではないです。なぜならばトップには、JCの先輩達や、50代、60代、70代の層々たる人達がいます。80代の方、上場企業社長もいます。そしてその中に入らせてもらうということは、そこでは、僕は中間管理職か平社員をやっています。皆様も社員には見せたくない姿かもしれません。お祭りで法被を着る姿も、社員には見せられない姿かもしれませんが、JCをきっかけにして、仕事を少し止めてやるということは、社会の人材作りを作っているということです。社員は社長がいない時に、一生懸命仕事をやっています。社員がJCばかりやって、社長はJCばかりやって、そんな事を言う人もいます。だから僕は、25船に船の役を取ってから、毎年社員を「とうかい号」に、乗船させています。現在は、社員の中から推薦して輩出していますが、「とうかい号」に乗船することは、1週間会社を休まれるので、社員がその社員を支えてもいいなと思う社員を乗船させています。なぜ、毎年乗船させているかと言うと、社員に乗船することは、本当に大変なんだ、遊びではないということを、教えたいからです。乗るまでは、楽しいかもしれませんが、乗船したら大変ですよね、本当に大変です。でも、実は今この時間も、一生懸命磨かれている訳です。

河　村：毎年の乗船者のご輩出本当にありがとうございます。そういう意味を持たせて頂いているのですね。

峠先輩：JCバッチに誇りを持つ、JC名刺に誇りを持つ、JCの名刺は人との繋がりをとても広げます。これから委員長をやられる方が、春日井31万人の都市で、JCメンバー130名として、人口からすると3%くらいです。すごく少ない確率です。議員よりも少ない確率でJCをやっていることになります。例え話でよく言いますが、JCの理事長は市長です。ブロ長は県知事、ブロックの役員は県会議員です。当然来年の委員長は、政治をやっている市会議員です。そのように考えますと、そんなことをやっている人間が、その社会のブームを会社に引き込んでやるチャンスを日々もらっている訳ですから、そのような事をやっている人間が化けないことは絶対にないと確信しています。JCには、とにかくたくさんの宝が埋もれています。5年後10年後に素晴らしい人材がいます。話は変わりますが、倫理法人会でこんなお話がありました。女は原始の時代から太陽だというお話です。女は男を引き付けます。女の人を追いかけている訳です。光輝いている訳です。しかし、JCメンバーには女性が少ないです。本当にそれでまちづくりがやれていると思いますか。私は、廃棄物処理業の仕事をしています。廃棄物は生産性がなく下支えする仕事です。でも、JCメンバーと本音でしゃべれて、自分の事を分かってもらえて、悩みも言えるような仲間がいるということに感謝しています。一度、自分の会社が火事になった事があります。建てて1ヶ月、かなりのお金を掛けた工場が火事になってしまいました。そのころの自分は、自分でなんとかしなければと思っていました。気は落ちます。周りの同業者は、ざまあみろと思っていたと思います。同業者は、取り合いです。自分のところが失敗していると、他者が笑っているような錯覚を起こします。幻想を感じる訳です。でも、ありがたい事に、JCは月に1回例会があって、委員会は行けない、月1回例会があって、やはり皆が気付いてくれます。実際、火事になった事は知っている訳ですが、月1回の例会には顔を出してと言ってくれる仲間がいます。そのことで、とても救われました。JCは、仕事を超えての人脈なんだなと、有り難い存在なんだなと思いました。

伊　藤：わたし自身もJCで多くの仲間が出来ることは本当にありがたいと思っています。

峠先輩：今日、ここにお話を聞きに来てくれている、メンバーの結束がすごいなと思います。生涯の友達です。話は変わりますが、皆さん、中学校や高校の友達は会いますか。会わないですよね、これはなぜかと言いますと、金銭感覚が違うからです。金銭感覚が変わってしまって、誘えないのです。JCメンバーは卒業したら正規の料金を払ってくださいね。3,000円の金銭感覚でも、友達の奥さんに聞いてから来るので、貴重な3,000円なのです。しかしJCの場合は、普通の様に使います、知らない間に預託金から落とされて、知らない間に1万円の時もあります。損だと思って飲めば、飲んだだけ人事が来てしまいます。だけど、僕は51になりましたが、40の時は、よくお金を使いました。だけど、今のこの時を大事にしてください。来年、委員長をやられる方は、頑張ってください。委員長と副委員長では、本当に違います。委員長は、本当に大変です。

河　村：峠先輩が委員長やられて時は、どんな委員長さんだったのでしょうか。

峠先輩：僕は、指導力研修委員会をやりました。今で言う、人作り系の委員会になります。人間力開発の委員長に役

は人を作るということで、委員長をやりました。基本的にJCは、“イエス”か“はい”で答えなければならなかったので、チャンスは必ずあります。で、やってすごく良かったです。委員会がすごく充実したなと思われるバロメーターは、出席率です。それで理事長は、優秀な委員会を選んできますから。やはり、雛壇に上がってスポットライトを浴びるというのは、何よりも委員会メンバーに感謝する瞬間です。僕が委員会をやった時は、会社の反対を押し切り、会社で毎週水曜日にやりました。水曜日の理由は、不動産屋がいたからです。それまでの僕は、仕事があるとは言って、家に帰っていました。嘘ばかり言って、JCには行きませんでした。それだけ人と関わる事が嫌いでしたし、考え方が変わっていました。皆と仲良くするよりも、自分が仕事を成功させたり力を持って、圧倒的に皆を認めさせてやると思っていました。自分が基軸になって、JCの活動に参画するかしないかを決めている時期がありました。しかし、委員長をやってそんな自分が委員長をやったので、7時からの委員会は、6時30分くらいから準備をして、待っていたが誰も来ない、6時51分になって副委員長が到着、53分になったらメンバーが来る、毎回毎回、本当に有り難いなと思いました。委員長をやっているので、理事会上程議案について焦ります。委員会には、気の有る人や無い人が来ます。有り難さを実感しながら人使いを勉強し、お金使わない、取引先でもないのに、わざわざ来て頂くんだな、有り難いなと思いました。委員長の時が一番勉強になりました。だから僕は、活力ある人とひとの繋がりを意識しましたし、それぞれの皆が絶対に僕が春日井を作る人間なんだと思い込んだ、だから委員長をやってほしいと思う。伊藤委員長は、実際やってみてつらかったですか。

伊　藤：すごく勉強になりました。

峠先輩：彼と会ったのは、「とうかい号」事務局開きでした。あの狭い所にすごく人がいて、前にいました。こんなでかい人が、白い手袋をして、汗をダラダラ流しながらご厚志の紹介をしておりました。すごく緊張度を感じました。仕事を聞くと、司法書士でした。司法書士も、こんなことをするんだ、昔の自分ではやりませんでした。しかし、委員長になったからやったんですね、彼をそうさせたのは誰なんですかね。そういうことを人事してくれた人に感謝してほしいです。JCはすごく良いし、皆が商売をやっている訳ですので、まずは、JCの中で仕事をやってほしいです。

河　村：いつも力強い峠先輩の力の源は何でしょうか？

峠先輩：力の源は2つあります。家庭と会社です。おろそかにしますと、矢が降ってきます。会社の業績や嫁さんです。家庭や会社をしっかり固めておかないと、JCをやっていることで、ひっくり返される時があります。だから、家庭と職場を守る為に、JCメンバーで仕事を回してほしいです。JCに行ったら、仕事があるんだ、その為に、僕が理事長の時に、皆の仕事を登壇してしゃべってもらいました。冊子にも残しました。会社の名前、今やりたい事を書いたりして、JC行くだけで仕事になりました。うちの親父にJCを認めてもらった時が唯一ありました。それは、事業をやるにあたり春日井市長と会えた時、JCの団体を認めてもらえました。それ以降は、JCばかりやってとは言われなくなった。だから、JCという引き出しをすごく高めてもらえれば、今は公益社団法人になっているので堂々とできるし、JCの魅力を感じ、バッチの重みを感じながら、やってもらえれば、それぞれが正解なので相手を認めあいながら、やってほしいなと思う。北朝鮮が今ミサイルを撃って来た場合、どうやって日本はしたら良いと思う。感情としては、みんな一緒だと思うが、どうする、どう思う、答えはそれぞれが正解だと思う。僕の場合は、耐える。耐えなければいけないと思う。昔の時代と違って、争いごとが絶対に良いことではないし、もしやったらやり返すよね、相手は誰か死ぬよね、こっちも死ぬよね、そしたらまた、やり返すよね、結局はどっちかの国が降参するまでやり続けるよね、何人死ぬの、何百人死ぬの、何万人死ぬの、僕は耐えなければいけないと思う。とにかく対話、それで解決するしかないと思う。JCの人達は会話をできる力を持っているわけだね、韓国、中国だとか色々な国の考え方があると思うけど、JCやっていると結構、計り知れないくらいの人脈ができるので、ぜひ役をやることで、相手をモブにさせず、タグ付けのように、誰かと繋がっていかないと駄目なので、今日から切り替えてもうと、JCは面白くなる。この中で売るだけで、100人が売るだけで30万人に影響する組織だよって、皆さんが楽しくて価値を感じれば、地域は変わる。

河　村：会社も含め組織をまとめる秘訣はございますでしょうか。

峠先輩：理事長、副理事長、委員長になったら、必ずメンバーを名前で呼んでやれよと、それをしないと活性化しないよと、下の人間が勘違いするだけ、こういうことばっかりしていると、外だけ見ていて、組織は中を見ないと、会社もそうですが必ず傾く。たまには、社員を施してやっ

てほしいし、JC のことも、内野から矢を打たれないようにして、船の場合は、船に乗っていないメンバーは、すごい疎外感を持っているの。

伊　藤：すごく勉強になります。

峠先輩：来年の委員会は 13 人ですね、であれば、来年の委員長をやれる人は、13 人の器になれるね、会社がもし 13 人の器でなければ、JC が成功できれば 13 人の器になれる。金も使わずにやり、すごく大変だと思うが、13 人の組織になれるこんな良いことはないね。魅力を売るんだもん。会社が 13 人になる、社員が 13 人、そのような形で全部仕事に絡めて考えてくると、頑張ろうと思わないですか。キーワードは、モブにさせない、自分もしない、相手にも感じさせないってことにすると、出席率は上がる。僕は 100% を狙ってた、絶対 80% は切るな、85、90 はいけと言ってた。新入会員は 14 人しか入ってなかったが、30 人はずっと昔から言われていました。その時の組織の思いと委員長の思いで 14 人なの。でも、達すればかなわないことでもないわけだね。30 人入れようと思った。三役は 1 名ずつ入れてくれ、10 人いるので 10 人、理事も 10 人なので、計 20 人、委員会でも 1 人入れてくれれば 30 人、1 人ずつこだわっていけば、その人は最後の最後で入れてくれる。そのようにして 30 人達成してきたし、船の時も理屈さえ合えば必ず入るから。必ず委員会は成功するはずなんです。

　ブランディング、ビックマウス、エビデンス。ブランディングは、仕事で言うとお客様ニーズを聞くこと、プランではないよ、相手の言う事を聞くことです。例えば、市民の意見を聞くことです。自分がこれの商品を売りたところで、市民が受けなければ売れないので、絶対に称賛があがらない。根性論で頑張っても、入らないのは入らないので。ブランディングは、委員会メンバーを集めて、委員長は何がやりたいの、しっかりしゃべってメンバーを盛り上げていけば、一枚岩になれるわ。次に、ビックマウス。委員長が、どれだけ語るか、どんだけ大きなことを語るか、しかし委員会メンバー固まっているわけですよね、ブランディングと言って、お客さん顧客のニーズを聞いている訳だから、それを片手にする企画を立てる訳だから。あと、エビデンスは、証明する事。やらなかったら、嘘つきだと言われるので。あとは委員長の責任は、何が何でも必ず達成すること。拡大も 30 人と言って 29 人だと、達成感はないよね。なので、委員長は何が何でも連れて来い。僕は、アカデミーやった時に、180 人くらいいた。先輩に言われて、これ 180 人の器になるなみたいなことを言われた。理事長前に、アカデミーやったので、LOM が 150 人だったので、LOM も 180 人くらいくるなと思って、やる前から 30 人いけるなと思った。後は、組織を固めること。出席率をとにかく高める。僕は、そこにいてこその頼りだと思っているので、理屈でなくて、そばにいることが大事だと思っている。そばにいる人は頼りになるよね。色々なアドバイスするよりも、そばにいる人はすごく頼りにならないですか。そばにいるって、すごく良い。仕事も家族も、友人も JC メンバーも全て。一番気の合う人を副委員長で指名しているわけですよね。そばにいてほしい、そばにおれば頼りにされる。なので、委員長の考えが分かる。すごい勉強になる。芯が出てくる。今のままでは竹輪になる。出席率は、活性化のバロメーターだから。距離の原則で、遠くなればなるほど人が来なくなるので、みんなが集まりやすい場所でやること。副委員長が 2 人来て、それぞれ 2 人ずつ連れてこれば、委員会メンバーは集まります。委員長が、そんなに気張らなくても組織の理屈はできるし、社員に営業させて、駄目だったらフォローさせる、そうすることで結果が出てくるようになる、結果だけは必ず取る、エビデンス、これが出来なかったら、達成感が無くなってしまう。それにこだわって頂ければ、ものすごい時代が変わる良い組織ができる。委員長が一番苦労します。そういうことを感じると、優しさが出る。まずは、そばにいる人間をどれだけ増やすか、そして、とにかく来させる、あとはその人達が共鳴しだすから、お酒でもついであげる、そうすることで全然変わります。相手は委員長ということで敬ってきているので。JC 卒業した後は、ものすごい牛耳れるようになる。楽しくて、わくわくしないですか。

河　村：そういうことですね。

峠先輩：僕の最近のテーマは、人のことを共に喜び、人のことを共に憂える。人のことを共に喜び、人のことを共に心配する。大丈夫なの、最近の人達は知らないふりをするの。何か感じ悪いね。良い話は、どんどん言うべきなの。言っておけば、つらい話も言えるようになる。楽しい話もしない、つらい話をしろと言われてもできないですよね。今日ここのメンバーで、心を開いて、自分の良いことをどんどんしゃべると、悪い事も聞いてもらえるようになります。今が良ければ全てがプラスだと思う。失敗なんて絶対無いと思うし。もし、皆さんが失敗した

時は、我々先輩が支えるので、僕もしてもらったので、何かあったら我々はJCメンバーということで繋ぐ。僕は、JCメンバーが好きなの。とにかく、チャレンジして色々な事をやって、新入会員をなんとかしてくださいよって言ってもらえれば、紹介するよ、何とかするわって、なってくるんだよね。自信を持ってください。

僕は、行政と繋がりたかったの。JCの人達は、行政と繋がることで、会社の株が上がると思ったし、行政の事を知ってもらうことで、親が認めてくると思ったから。個と公の調和、個人の確立と、公共心の創出、一人ひとりがしっかりすること、自分がちゃんとしているから人のことを思う、まちのことを思う、社員のことを思う。個人がしっかりしていれば、公のこともちゃんとできるわけだ。それが調和できれば、JCばかりやっていては駄目、仕事だけでも駄目、家のことばっかでも駄目、そういうような感覚で、ぜひまちを牛耳ってください。

素直ってのが一番良いんだって。イエスかハイなんだけど、なかなかなれない。素直ってのは、すごく大事で、でもなかなかなれない、自分の考えがあるのだから。でも、人の道としての世の中で動こうとしたら、素直が相手と繋がる接着剤だと思える。我を出すと、どうしても駄目、人に頼まないといけない時が来るので、みんなと自分の気持ちを打ち明けて、皆仲間にして、出席率高めれば、自ずと、もし周りから評価されなくても、自分達が盛り上がっているなら、それが一番宝物です。

河　村：峠先輩が理事長をされていた時に80%を超えるLOMメンバーの出席率、現在は50、60、70%だと拍手がおきるくらいの結束力です。

峠先輩：やる気になったポイントがある。それは、トップの人間がメンバーに名前で呼ばないわけ。だからいけない。出席率あげるのは、売上を上げるのと似ているのだけど、どうすれば良いと思う。楽しいものが待っていればいいじゃん、では、自分達が楽しんでいますか。重たく感じてない。楽しいですか。でも、人と出会えることを楽しみに変えると来ます。委員長をやる人は、楽しんでください。自分が楽しめれば、必ず心は伝わる。駄目だったら、イベントを組む。BBQやイベントを作る。1回来れば、2回目は来ます。そのように出席率を上げて来た。100%、いや9割来ないと困る。例会始まる10分前にメンバーの出席を確認してもらい、例会出なくてもいいので、電話掛けてきてと頼んだ。本人は、本当に嫌ですよね。すると、委員長と言いますよね。委員長は悩みます。そここそがブランディングです。なんで来ないのか。そこで話を聞いてあげないといけない。結果を責めてはいけない。攻め心のない厳しさを持つ。厳しさはいるが、追い詰めたらいけない。僕もそうですけど、皆さんも気を上げたくないですか。気持ちを上げたいですよね。であればどうすれば良いでしょうか。気持ちを上げる時には、気持ちが上がる人のところに行くことです。楽しいところへ行くのです。お金の無い時には、お金のあるところに行くことです。運の悪い人は、運の良い人のところに行くのです。運が良い人は、運の悪い人とは、付き合いたがらないです。お金のある人は、ない人とは付き合いたがらないのです。だから、自分を高めなければならない。返事は、すごく大事。ハイ。そこから始めなければならない。

僕は皆さんの事を、後輩だと思っているけど、必ず化けるなと思っている。絶対化けてくるなと思っている。頑張ってください。ただ、エビデンス証明しなければいけないので、盛り上がろうとしているのに出席率が悪かったら、活性化してないよね、売上や資本金や社員数で、会社の規模が決められるように、どれだけ充実していても、人が少なければ活性化していると思われないから、人はどうしても呼んでこなければならない。これはこだわって、人を呼ぶんだ呼ぶんだとして、一番のポイントとしてもっていけば、絶対に上がる。これが弱かったのだ。事業の事ばかり考えて。気持ちが弱いんだ。人を呼ぶんだ。何でもいいので、呼ぶんだ。売上倍増するよ。人に会いたくてJCやっているんだから、人を巻き込んだらいいのだから。

河　村：50周年に向けて、一言いただけますでしょうか。

峠先輩：私たち、先輩らは、皆さんの活躍があって、座布団に座らせてもらって、今日までいるから、皆がもっと活躍をしてほしい。自分達が楽しければ、JC頑張ってるな、すごいな、今度は新聞載ってるな、見てますから、僕らは皆さんの頑張りを、あぐらをかいて、終わった過去の人間として、口は出さないけれど、そのようにいる。皆が生き生きとしてくることが、我々もJCを認められることにも繋がる。春日井JCが盛り上がれば上がるほど、先輩としてもすごく楽しい、だから、皆と仲良くして、個性を知って、人を動かしながら、動かすとは用件を指示するのではなくて、相手の良いところを引っ張るだけで、人は動きだすので、だから、名前で呼べ名前で呼べと今の理事長に、外の人事取ってくるのはいいけど、中がぐちゃぐちゃになってしまうぞと、組織が割れてしまう、船に乗っていないメンバーは冷めているので、その人間は来年は来なくなるので、乗ったメンバーも乗っていないメンバーもマイナスのメンバーも皆巻き込んでやらないと、それには、メンバーの力が必要。お前が行くなら行くわとか、あんたが行くならわたしも行くわとか、船だとか言ったら来ない人がいるぞ、否定されているみたいで嫌だね、でもそういう人も将来いつか化けるよ。その瞬間だけみていちいち評価しては駄目。若いのだから。そういうことはしなかった。僕は僕で人脈作ってやるので、これなにかあるなって思ったら先輩の特徴つかんで言って。これ、なんとかならないと言ってくれれば、中部大学でも動くよね。市役所でも動くよね。道路は閉鎖できないと思うけど。楽しくやってください。自分の可能性を高めてください。家庭と会社の理解をもらって、理解しないと思うけど、理解させる理由は1つある。家で一切愚痴を言わないこと。疲れた、JCが、あいつは、とか。楽しい楽しいと言っておけば、応援してくれます。

一　同：本日は、ありがとうございました。

2009-2017 ４１年目から　４９年目までの歩み

2009

清水 隆行　理事長
共に育もう 夢と誇りを持って
創りあげよう
魅力あるまち春日井へ

100％出席目標例会の達成

わいわいカーニバルの開催

わんぱく相撲の開催

ドリームパフォーマンスミーティングの開催

県外事業7月度例会
おんたけトレッキングの開催

3月度例会 夜の防災フェスタの開催

春日井まつり 鎹祭の開催

2010

三宅 隆夫　理事長
共に描こう 高い志を持って
築きあげよう
希望に満ちた春日井を

わいわいカーニバルの開催

わんぱく相撲の開催

４月度例会 防災フェスタの開催

７月度例会 サマーキャンプの開催

春日井まつり
「Let's try TOFU！」の開催

2011

風岡 明憲　理事長
若き挑戦が未来を創る! 飛躍せよ!
笑顔あふれる春日井のために

一致団結その先にある喜びを

３月度例会100KM ウォーク

４月度例会魁･情報塾青年よ、自身を発(はな)て

わんぱく相撲の開催

７月度例会命の花をさかせよう

9月度例会 ブロック会員大会運営委員会

第44回愛知ブロック会員大会 in 春日井
～書のまち春日井、いっしょにわっしょい～

10月度例会第１回春日井わんぱくオリンピック

11月度例会さきうたサミット
みんなでつくる音楽の日

2012

芝田 貴之　理事長
つなげよう感謝のこころ
OMOIYARI溢れる春日井の為に!

３月度例会「東日本支援エール
(東日本へのこころの手紙及び桜の人文字スカイアート)」
４月度例会
「志をもって生きよう」講師:田舞 徳太郎 氏
５月度例会
「わいわいカーニバル(スーパードッヂボール)」
５月事業「わんぱく相撲」
６月事業「まち知るサイクリング」
７月度例会
[春日井フレンドシップ～ OMOIYARIクルーズ～]
８月事業「すべては絆から(八曽モミの木キャンプ場)」
９月度例会 ～元気いっぱい、おにごっこ～
10月度例会 心に響け！
キッズダンス カーニバル IN 春日井まつり
11月度例会「発見！！ 春日井の魅力人！」

2013

下田勝彦　理事長
過去に学び　未来へつなげる
共に進もう　！
活力溢れる　春日井の未来へ！

３月度例会「活力　あふれる人倍増計画」
５月度例会「わい　わいカーニバル
(スーパードッヂ　ボール)」
５月事業「わんぱ　く相撲」
６月第1例会「45　周年記念式典」
中長期ビジョン　策定
「世代を超えてひ　とと人とが笑顔でつながり、
みんなが主役に　なれるまちづくりの推進 」
７月45周年記念　事業「めぐり愛100キロウォーク」
８月度例会「演劇　さるかに合戦」
10月度例会「春日　井まつり頂上決戦
サボテンフォード　仲間のために熱くなれ」
10月事業 市制70　周年事業書でつな
ぐ野外揮毫アート　「ひとつなぎの大揮毫」

2014

竹田卓弘　理事長
認め合う心　を育むまち
春日井へ
愛と未来へ　の架け橋に

３月度例会「夢　・無限の可能性」

４月度例会「第　１回春日井ムービング」

５月度例会「第　19回わいわいカーニバル
(スーパードッ　ヂボール)」

５月事業「わん　ぱく相撲」

10月度例会「第　38回春日井まつり

ワールドフェス　ティバル」
１１月度例会

「みんなの思い　を紙飛行機にのせて」
場所:県営名古屋空　港敷地内FDA飛行機格納庫

2015

伊藤正樹　理事長
～原点回帰～
すべては共に輝く
春日井の未来のために！

１月公益社団法人格取得

３月度例会「美輪明宏講演会」

５月度例会「第20回わいわいカーニバル
(スーパードッヂボール)」

５月事業「わんぱく相撲」

９月度例会「未来音」(野外音楽フェス)

１０月度例会「第39回春日井まつり」

2016

渡辺佳朗　理事長
共に挑戦し、創造しよう、
こころ豊かなまち春日井を

４月度例会「橋下徹講演会」

５月度例会
「第21回わいわいカーニバル
(スーパードッヂボール)」

５月事業「わんぱく相撲」

７月度例会
「サマーキャンプ～原始時代」

９月度例会「第２回未来音」
(野外音楽フェス)

１０月度例会「第４０回春日井まつり」

2017

堀尾国大　理事長
輝く人財がまちを創る、
信頼が共鳴するまち、春日井へ

２月度例会「輝くjaycee塾
～誇りと自信に溢れる青年経済人～」

４月度例会「ＪＣサンデースクール」

５月度例会「第22回わいわいカーニバル
(スーパードッヂボール)」

５月事業「わんぱく相撲」

６月度例会「入会認証証書伝達式」

７月度例会「チャレンジキャンプｉｎ郡上
～ここでしか味わえない黄金体験」

９月度例会「とうかい号」乗船者報告会」

１０月度例会
「ＪＣハロウィンフェスティバル」

１１月度例会「「秋の体験ふれあらんど」
～食べて作って繋げる地域の輪～」

第４４回ＪＣ青年の船「とうかい号」
事務局主管　海上最強事務局集団

next 2018

先輩インタビュー

第44代理事長　芝田　貴之 先輩

一口メモ

平成29年8月23日、とんまる勝川店にて、第44代理事長　芝田貴之先輩のお話をお伺いさせて頂きました。本年「とうかい号」事務局を担わせて頂いた私達にとって、1LOMで船を出されたフレンドシップ事業は、わたしたちにとって本当に興味深い話です。スケールの大きい事業について、今の現役メンバーとの考えの違いに大きな驚きを得ました。

聞き手:河村勇祐副理事長（以下「河村」）、伊藤宏委員長（以下「伊藤」）、川島友樹副委員長、中村祐介副委員長、大島淳副委員長（以下「大島」）、川村裕司委員

伊　　藤：LOMへの影響面でどのような事を期待してこの事業を行おうと思われたのですか？　伊藤正樹先輩からフレンドシップをやるにあたり、柴田先輩からの号令があっての事だとお聞きした事がありまして、理事長の立場としてあれだけの事業をLOMでやる意図、「LOMこう変えてやろう」という思いあって事なのかを芯の部分を教えてください。

芝田先輩：表向きには、理事長の号令でやるっては絶対に無いです、伊藤正樹委員長がそう感じかもしれないが、そう持ってたのが事実。理事長の想いで事業が起こる事は絶対に無い。何故かと言うと、理事会予定者の時に朝まで締め付けられ、丸を打たされる。自分で丸を打っている。いくら私が「これがしたい」と、言ったところで、丸は打たない。そこは納得して丸を打っているのだから、伊藤委員長がそう感じただけで、大号令でやった訳では無い。そこは理解して欲しい。逆の思いで来られても、出来ないよね。あくまで委員長の想いです。納得して丸を打たなければ出来ない。何の事業でも同じであろうと。理事長がこれやりたいと言ってやる事は無い。

伊　　藤：そういうことなのですね。それにしても大きな事業ですね。

芝田先輩：春日井のLOMは峠先輩が32船をやられた頃から高橋さんも日本JCへ出向して、外に目を向き出した。内向きだったら箱例会やってたLOMが外向きになりだして、公益とかでは無く、春日井なら出来る、大丈夫だろうと周りから思われていた。そうすると外の事業へも行かなくてはならないし、風岡ブロック会長の話も…組織力があるから周年に向けて大きなことが出来ると思った。キャンプ、100キロウオーク、春日井ならなんでもできると思っていた。本年の「とうかい号」も同じでしょ。

伊　　藤：今回「とうかい号」をやらせて頂いて、1LOMで船を出すことを想像すると本当に大変だと思います。過去の先輩方の事業も大きかったり、継続事業の始まり等、影響力の大きな事業が大きかったと思う。一方、最近のLOMの事業はどんどん小さくなっていると思う。先輩方のお話をしっかりLOMに伝えようと思います。

芝田先輩：事業をやるためにJCをやっているわけではない。JCのためにJCをやるからつまらない、出席率が下がる。現役の時は思いさえあれば何でもできると思っていた。

河　　村：その後、LOMメンバーの意識は変わりましたか。

芝田先輩：色々な意見があった。やった方が良かった、やらない方が良かった。

継続が目的ではない。携わったひとでも色々な意見があった。「とうかい号」も同じでしょ。

伊　　藤：継続事業ではなく、こういったフレンドシップや未来音のような0から1を作るのはすごくエネルギーのいる事だと思います。

芝田先輩：浜松LOMもやっているしね。前年浜松の事業（船）に春日井から参加してもらって準備はしていた。キャンプ事業と同じ、ただ、人があれだけ集まらないとは思わなかった。

河　　村：一番知りたいのは、理事長の考え、理事会でGOを出した時の気持ち、訳を知りたいです。LOMの為なのか、これで一致団結しようと思ったのか、外に発信したかったのか、春日井ブランドを見せたかったのか、そのあたりを教えて頂きたいです。

芝田先輩：そもそも、12年の時に加藤龍太郎委員長の事業（東北）、渡辺委員長の田んぼ等から人づくりだからフレンドシップ。リーダーシップを小柳出委員長。堀尾委員長に夢を持てる子どもにしてもらうために、気球。会員拡大は、平林委員長。拡大こそこれだけのLOMだからシステマ―チックに、虎の巻を作るなど出来ないのかなと思っていた。拡大であればこそ虎の巻。会員資質に中野委員長。事業全体が中、外を向うが、広告塔がとにかく発信する、家族に対してJCを分かってもらえるためにも、応援してもらうためにも、近郊版に乗せてもらった。加藤委員長がバンバン乗せてもらった。それが自分たちのやる気にもなるし、家族にもわかってもらえる。お父さん頑張っているじゃんと思ってもらえる。それがフレンドシップにも、拡大にもつながる。それが1番だから派手に見えたのかもしれない。

河　　村：そう考えるとすごい事業をやったんですね。

芝田先輩：今思うとそうだね。良いも悪いも派手だった。みんながやってくれた。

河　　村：そのぶん、後ろから見ていたらすごく面白い理事会でした。

芝田先輩：加藤委員長も良かった。東北に行って、こちらで空撮してそれを持って行った。

伊　　藤：その時の委員長さんのメンバー構成をみると凄かったと思います。私が入会した時にカッコいいと思った先輩方ばかりで。

芝田先輩：それは自分たちも同じ、昔の先輩は凄かったと思っていた。また、次のひと達もそう思ってくれるはず。それはそれとして、全ての事業がどうこうではなく、事業をやる事によって家族にわかってもらうのが一番の目的だった。

河　　村：全部つながっているのですね、JCメンバー、家族にもつながる、拡大にもつながる。

芝田先輩：全てリンクするんだよ。手法は何でもいい、どうせやるなら面白い事やればと。フレンドシップは事業費が少なかった。

河　　村：そんなに安かったですか。

芝田先輩：70万ちょっと。登録料は2700万。「とうかい号」は東海4県が助けてくれる。伊藤正樹委員長は、他の委員長と衝突もあった。それでも負けずに委員会もしっかりやって、靴底を減らして。自分も回った、32LOMを全て回った。自分が現役の時竹やりでも（想いがあれば勝てる）と思っていたように、本職さん、現役がそう思わなければいけない、JC現役が春日井のまちを変えると。

伊　　藤：愚問かもしれませんが、プレッシャーなどはありませんでしたか。

芝田先輩：無い。

伊　　藤：自分だったら、お金にしても、穴をあけてしまったらとか考えてしまいます。

芝田先輩：自分が委員長の時からやりたかった案件だから。その時の理事長に言ってもGOは出ないと思った。お金の工面ではなく、集める自信があった。自分でもなんとかなると思った。船側にも思いが伝わった。想いが伝わればなんとかなる。

河　　村：自分が加藤委員長の事業で空撮をやるとき、小学校1回（飛行機）が飛ぶのに100万かかると言われました。春日井市内小学校39校やりたかったが、予算がなかった。空撮会社をたくさん回って、どうしても春日井の小学生から愛、勇気、希望を作ってもらい、東北の小学生に渡してほしかった。ある空撮会社の担当者が東北の出身者で、「心意気を買いました、社長に相談します」と言ってくださり、全て無料にしてくれました。それが最後の最後に当たった会社でした。担当者が東北の岩手の方でした。一緒に社長を口説き、「親御さんに写真を売らせてくれるんだったら」と言う条件で協力してくださった。買う、買わないはもちろん自由ですけど。7校の小学校が協力してくれました。

芝田先輩：加藤委員長の事業は本当に良かった。結局、想いが伝わればなんとかなる。

伊　　藤：大規模な事業を成功させた秘訣は何でしょう。

芝田先輩：想いですね。一人の力では無理だから。組織力はすごい、賛成、反対、色々あるが、決まったらみんなやってくれる。そのあとに、良い、悪いと言えばいい会員大会なども経験しているLOMだから、何とかなると思っていた。

伊　　藤：今、委員会メンバーに動員をすると、家族が何々とか話になります。家族をしっかり巻き込んでいける協力してもらう秘訣を教えてください。他のメンバーにも伝えていきたいと思います。

芝田先輩：さっき出たけど、発信です。メディア等で出てれば、お父さんちゃんとやっているんだと言えればちゃんと来る。クリスマス会などでも楽しければ来る。家族のためにも交流会は要ると言えばいるが、だれのために何をするのか。自分の考えはそうです。

伊　　藤：自分も総務にいるとき妻に議事録を手伝ってもらった事がありました。そうしたら「意外とまちの事を考えているんだねと」言われました。

芝田先輩：一番ダメなのはJC行って来るといって遊んで

いるやつ。

伊　　藤：こういった大きな事業を行うには、多くのメンバーの参加が不可欠だと思いますが、メンバーをうまく巻き込むためにされた工夫を教えてください。また、さまざまな役職を経験される中で、委員会メンバーを巻き込むために効果的だったことを教えてください。自分達も動員をしているんですが、なかなかうまくいかない。出席率をよくする、委員会メンバーを巻き込む秘訣を教えてください。

芝田先輩：一番いいのは顔を合わせる。ランチでもいい、顔を合わせる。来てくれたメンバーに、ポンコツだと思われないような会議・委員会をする。来て意味がないと思われないようにする。足を使って。自分がアカデミーの時、塾リーダだった。愛知中を飛び回り、ランチなどでも顔を合わせた。それが大事。

河　　村：50 周年事業に向けてアドバイスを頂ければ幸いです。周年ならではのポイントを教えてください。

芝田先輩：50 周年だからとか、周年だからと言って事業を考えるべきではない。

50 周年は内部の話、世間のひとは関係ない。50 周年だから予算は多少多いから、また周年だからと言えば多少他団体からの協力も得やすいだけ、自分は 45 周年の前年でもあれだけの事業をやった。あくまで理事長の所信を読んで想いを汲むべきと思う。44、41 等、周年の前後の年の方が好き勝手やれる。周年の方がやりにくい。周年だからとかは考えない方が良いよ。

伊　　藤：色んな立場を経験されていると思いますが、その上で事業を通じて一番嬉しかったことを教えてください。わたしは、「とうかい号」下船の時、一般団員の顔をみて嬉しさを感じていました。

芝田先輩：誰かに感謝されること、ありがとうと言われることがうれしかった。対内、対外問わずそう思う。

伊　　藤：事業を終えて、学んだことや気づいたことはありましたか。また、もう一度同じ事業をするとしたら改善したい点はありますか。僕たちもやりながらいろんなこと教えていただいたり気づいたりしているんですけど、特にフレンドシップ事業をやって、終わってみて気付いたことや勉強になったこと、仮にもう 1 回フレンドシップ事業をやるとして、こんなふうにやってみたいとかありますか。

芝田先輩：そんな恐ろしい事ようやらん（笑）。皆にはあのフレンドシップが頂点に見えるかもしれんが、今までやってきたことを繰り返しやっただけ。自分が委員長をやった時はもっと面白かったから、その時の感覚とあの時の感覚が全然違う。やはり委員長で何かやらないと、事業を通じてよかったなあとか思えない。とうかい号 36 船の出航時は「やっと仕事終わった…もう寝る」と思った。あれが一番きつい。

伊　　藤：フレンドシップ事業について、市や地域、他 LOM からの声はどうだったでしょうか。影響力はどうでしたか。

芝田先輩：あれだけ影響力のあることをするとなると、歴代理事長の中でも賛否両論だった。皆お金の心配をしていた。「(資金が) 集まらなかったらどうするのか」と言われ続けていた。それでも反対していたメンバーも動きだし、結果サポートグループができる。「伊藤委員会だけじゃなく、俺たちもやらないと！」って。

伊　　藤：フレンドシップ事業から何年か経った今振り返ってみて、芝田先輩にとってのフレンドシップ事業とはなんだったのでしょうか。

芝田先輩：キャンプと一緒。何かのタイミングがないとあれだけのことはやれない。でも自分にとってでかい事業とは他の事業で、理由は理事長とは責任を持つ立場だが実際現場で自分がやるわけではないので。

大　　島：50 周年迎える中、現役のメンバーに対して何か一言頂けますでしょうか。

芝田先輩：とにかく思いを持って、自分が何かをやるんだという気持ちが大事。意識変革団体なんでしょ。事業をやるためには、「事業のために事業をやらないこと」。やることに対しての背景があって、目的がある。それを達

成するための手法であるわけだから、それができていない気がする。それさえできれば何も怖いものはないはず。拡大って何のためにやるの。

大　　島：いろんな意見を取り入れるためですかね。

芝田先輩：メンバーが増えれば春日井の為に動けるリーダーが増える。拡大は春日井のまちが活性化するための近道。組織を守らなきゃいけないしお金もいるけど、明るい豊かなまちづくりの近道として、拡大してメンバーを増やすことが必要だと思う。春日井のまちがよくなるために何かしようと本気で思えば何でもできると思う。理事長がとか理事会が、と思うとメンバーも来ないし、つまらなくなると思う。楽しまないと。俺の意見は少数派だと思うけど（笑）。意識のある人を増やしたい。

河　　村：今、色々と現役時代を振りかえられてどうでしょうか。

芝田先輩：一つ後悔がある。春日井ナンバーが作れなかった。できたのが2014年。魅力ある街とは、と考えると、「春日井人は他府県に行った際、名古屋人と名乗る」ことを解決するには、春日井ナンバーを作ればいいだろうと。そもそも尾張も小牧も関係ないし（笑）。結局市がやってしまったけど、JCがやったとなれば、皆誇りを持てると思う。それくらいの力がJCにはある。「春日井って面白い」と思えば、委員会も盛り上がるはず。それを理事会でああ言われた、とかやっているから人が来ない。

河　　村：本気でやっていた人は、昔の方が多かった。どんな問い掛けにも、ぶれないものを何かしら持った人が先輩には多かったです。時代も変わっているし、今は自分の意見を通そうとしない人が多いというか…。

芝田先輩：余裕のない人が増えたのかも。人もいない、一人でやろうとしたら大変だし、そうなるとこじんまりしてしまうのかも。組織の勉強になるし、友達はたくさんできた。ただ行った先々で知り合いに会うのは嫌だった(笑)。

伊　　藤：毎回、いろんな先輩を伺う際、こういう話をしようというのがある程度あるんですが、今回自分たちが思っていたことが逆ということが分かりました。

芝田先輩：今の現役の子たちには勝てない。あの時は、と威張っても仕方ないし。現役に頑張って、と言うのもおこがましい。

その後、お話は現役時代のいろいろな思い出話に及び、楽しい時間を過ごさせて頂きました。

先輩インタビュー

第45代理事長　下田　勝彦 先輩

一口メモ

平成 29 年 8 月 24 日、株式会社秋吉組にお伺いさせて頂き、第 45 代理事長　下田勝彦先輩のお話をお伺いさせて頂きました。公益社団法人格取得の経緯について、45 周年の事など今の私たちが最もお伺いしたいことに明確なアドバイスを頂きました。50 周年に向けて LOM メンバーすべてに伝えたい、貴重なお話を伺うことができました。

聞き手:河村勇祐副理事長（以下「河村」）、伊藤宏委員長（以下「伊藤」）、川島友樹副委員長、川村裕司委員（以下「川村」）

伊　　藤：本日はよろしくお願い申し上げます。まずは、公益社団法人格の取得についてお伺いさせて頂ければと思います。

河　　村：来年の予算を決める中で無理に公益、公益っていう予算建てでここ数年やってますけど、パッと息をついた時に日本最大の大阪とか、来年会頭が新潟から出るのですが、新潟は 50 人、100 人位の LOM かと思ってホームページを開いたのですが 230 人位の LOM で、そんなリーディングカンパニーが一般でやっているのでかっこよく見えてしまって、公益にこだわらないと言いますか、我が道を行く姿勢がちょっと明るく見えてしまって、45 周年の下田理事長の時に僕も委員長をやらせて頂いて看板が何よりもっていうのが僕も大賛成なんですけど、この 5 年経った今なのですがその気持ちとして、ちょっとそういうのが芽生えてしまったのでその時の父親である下田理事長にお聞きしたいと思いまして。

下田先輩：さっきの公益の河村君の話だとすると公益の配分だとか、攻撃性のある事業にもっていかないといけないと縛られるというのは、どうかって話だと思うんだけど、例えば公益やめたら、お金を沢山使って、出席率、結束だとか、会員の為に使うゆとりも多少出来るんじゃないか、動員の話も含めてってところだよね。私の結論からするとそういうマイナスのコントロールは出来ないんじゃないかなっていう話。例えば 40 人の会社やってるけれど、売り上げが減ってきた、30 人に人を減らして、売り上げが減ったなりの会社で利益を確保しようと思うと大体それより会社って小さくなる。マイナスのコントロールってなかなか出来ないから。対外事業を多くしてやる事によって LOM のプラスになることが幾つかあるよね。減らして中の結束だとか、皆の為になる、出席率が上がってくるとかいう話になるような気が私はしなかった。もっと、出て出て初めて上がっていくもんだって発想。プラスのコントロールも難しいけど、マイナスのコントロールはなかなか出来ないんじゃないかな。極端に言って、外に出て公益もとって、対外いって、そのままどういう流れか知らないけど、それに巻き込まれたって言ったら語弊もあるけど、その BOX に入ってきた人達もぐんぐん引っ張っていくっていうのが組織ってそういうものじゃないかなって気もするんだよな。考え方次第、どちらが上手くいくだろう。最終的にはどちらが上手くいくのだろうかっていう判断を何処かでしなきゃいけないけれど、根本的には良いとか悪いとか、その考えはどうとか、右とか左とかって話ではなく、考え方の話だと私は思う。河村君、新潟とか大阪とかの話を

聞いてみるといいよ。最初にどういう議論があったのか。

河　　村：そうですね。もしかしたら初めに公益とったのかもしれませんしね。

下田先輩：そうだよね。なかなか難しい話だよね。やっぱりあるの、比率を気にしなきゃいけないとか。

川　　村：やっぱりありますね。僕も丁度公益になった年に局長をやらせてもらったんで本当に細かくやらせてもらって、やっぱり比率って単純に比率っていっても50%って話なのでなんとなく出来るのかなと思っていたんですけど結局外に出ていく日本だとか、負担金ではないですけど勝手にうちの中に入っちゃうので、それを抜いた分の残りで全体の50%なので。

下田先輩：分母はどうなの。分母は負担金は入ってるの。

川　　村：入ってます。

下田先輩：それなんとかならないのかな。

川　　村：結局「とうかい号」ってLOMによって対内にしたり、対外にしたりって計算の仕方が違うみたいで、うちも基本的には対外なんですよね。そういう意味で言うと日本に出すやつは対外でいいんじゃないかいう議論も正直その時もしたんですけど結局はやはり流れの方が強かったっていうのもあるのでそのままいっちゃったんですけど。

下田先輩：今、税理士に見てもらってるかな。

川　　村：見てもらってます。

下田先輩：3年位で一気に緩くなってる、公益事業部の見方とか。緩くなったから踏み切ってるんだ春日井青年会議所は。私が局長の時からその話出ていたから。とてもとてもだった、あの時は。全然手も足も出ない話だった。だけどあの2年位でばらばらで窓口の考え方によるみたいなところもあったんだけど、先生通してやると取れるようになって、緩くなってるから。またそれから何年も経っているから愛知県だけじゃなくて他の青年会議所、日本にもそういう機関があるから他の県で今の極端な話、対外JCが公益収を認められてる県もありますよ、と話があったら先生に話して押してもらえばいいから。どんどん緩くなっていく事は間違いないから、その見方は厳しくなったらやめればいい、極端な話だけど。

川　　村：緩くなっていけるようになったのも僕の2年前位からその動きになって前年度2014年の予算を見て、いけるってなって、2015年からスタートしたんですよね。

下田先輩：今はもっと緩くなってるかもしれない。もっと簡単に減らしてくれるかもしれないからもう1回確認してみて判断で、一般だとか、公益だとか考え方の基準の節目かもしれないけれど、今の話の中で新しい傾向も踏まえて公益でもやりやすければもうちょっといいものになるんだからっていう発想も良いかもしれない。

川　　村：有難うございます。

伊　　藤：次は、周年についてお聞かせください。

下田先輩：周年ね。良かった点、悪かった点はまだ渦の中に自分でいるから何とも言えないところもあるんだけど、人を立てる訳じゃないけど私が周年やった時に笠島さんが委員長やってくれて、それの基本方針のテーマが「愛」だった。愛ってなんなんだって思ったけど、今思うとその通りのような気がする。周年って組織に対する愛だとか、それは青年会議所だし、まちに対する愛だとか、そこが試されている。あるいはそれを機にそういう風に自分をもっていかなきゃいかん自分を。例えば何故かっていうと、うちの会社も来年50周年させてもらうんですよ。お陰様で2月位勝川プラザでこじんまりとだけどやらせてもらおうと思ってる訳ですよ。それに対して2月の末に会社で頑張って、儲かってないけど旅行行くとか、何かないかなとか、式典の時に映像作ると喜ぶかなとか何よりも創業でやられた社長にやったったっていう気持ちになってもらいたいなって心底思うわけ。なぜ心底思うかって会社を愛してるからだよ。そういう気持ちに自然となるわけ。逆に言うと、周年に対してどうまとまっていくかっていうのはこの青年会議所だとかまちづくりっていう事で良いんだけど、そういうのに対して自分たちがどれだけ本気かって、気持ちがあるのかって試されてるんだな。そういう人達の集まりだったら自然と1歩ずつ前に出てきてくれる。逆に言うとそういう現状がないとしたら、周年だからやろうぜって言い方ももちろんあるんだけど、言い方としてはそうじゃなくて周年だから皆で1歩踏み出してやろうぜっていうところの途中の言葉を引っ張っていく方は考えていかなきゃいけない。まちづくりって大事だと思わんかとか、青年会議所のおかげで人脈増えたんじゃないのとか、青年会議所に私らがいなかったら何処の団体でこういう繋がり作るのとか、ぶつぶつ言うのはいいけど、これのおかげで日常が刺激的なんじゃないのかとか、色々なところの引っ掛けっていうか、言葉をメンバーに投げかけてそっちの方向に引っ張っていかないとな。やりなさいって言うだけじゃないから、そこじゃないかな。ポイントとなればその組織の愛着だって言ったけどそういう旗印を考えて理事長やる川村君だって考えてるだろうけど、そういうところを大事にやった方がいい。そうしないとぐちゃぐちゃになる。そういう整理をしないと、こんなにやっているのに何でやらないんだとか、何で皆はこうなんだろう。私はこうやりたいんだけど堂々巡りしてしまう。だから周年ってそういうもんだから。川村君の所信にあるならわかるけど私の所信にも少なからず周年にからんでいて節目というのは過去を振り返りこれからに至り過去を振り返る事。それは何故かと言うとそれがこれからの活力になるからだと、私は基本方針に書いた。これからもっと先にもっと頑張っていこうという節目で、人は今までの事を考えて、今どうあるべきか自然と考えるのが周年なのかな。終わってから思うことはやっぱり周年っていうのは自分たちのインドアの中の話だけど春日井市だったり1番は市だね。いくらなんだって青年会議所をやらせてもらえるのは、春日井市だとかそういう所があってこのまちづくりの活動が存分にやれるっていうのがあるから春日井市であったり、ライオンズの先輩達がいるところでもいいんだけど、そういう人

達もこういう節目というのは、どういう風なんだろうかとか、見てるから青年会議所の事。それはきっちりやらないといけない。その中でさっき言ったように中心に何か据えてやるっていうのも大切だけどもう1つはやっぱりLOMメンバー皆、それぞれの立場、立場で役割を果たすっていうのをきっちりやらないといけない。地味な話だけど委員長だったら委員長がやらなきゃいけないところあるし、副理事長だったら副理事長がやらなきゃいけないところもあるし、川村さんが理事長やるんだったら理事長が代わりきかないところは自分で行かなきゃいけないし、というところだよね。そこをきっちり認識してやるのは大事。LOMに影響が良かった点、悪かった点っていうのは、そういう意思統一ってのは言うのは言うけどなかなか出来ない。さっき言った途中の仕掛けがいるはずなんだけど、意外とスケジュールばたばたするから。45周年はブロックの事務局を出したから、なかなか大変だった。人ってバランスがあるからね。私は5の周年の割には、周年大事だぞ、周年大事だぞ、いってたつもり。どう伝わったか分からないけど、なんで言ってたかって、そっちに人が出てたから比重はやはりLOMにあるってしとかないとバランスが悪くなるから。ただ風岡さんとはお互い仲が悪くないし、相性も悪くないから。風岡さんは先輩だし、そこで折り合ったのが2、3回あった。なんかあれば直接話して折り合いをつければいいと思って私は割とこっちの事いった。この人だったから上手くいったんだろうし向こうも礼儀として出させてもらってるという態で、JCの事もよく知っている人だからLOMの事をやらなきゃいけないって言ってくれるし、その辺の苦労が45周年の時はあったかな。来年はそういうことが気にせず出来るんだったら思い切ってやれると良いよね。皆で50周年、それまでの途中を皆で上手く導いていけるかという話。

川　　村：45周年っていうツールを使って春日井青年会議所は生まれ変わったとか、何かそういう45周年をツールでみた場合に引き締まったとか、過去を振り返ってちゃんと未来に繋げれたのか、考えが新しくなったとか。

下田先輩：私は周年を迎えるに辺り理事長という立場でどう考えて理事長になったらやってやろうと思ってた事は、なんか辞めるってことやってやろうと思ってた。例えば、「とうかい号」の現地のお出迎え、結局行ったけど。小さな話だったかもしれないけど2、3個やめてる。こういう事しかやらなくていいって。

河　　村：「とうかい号」のお迎えは反対だったんですか。

下田先輩：現地のお迎えはね。あんな事やってどうするのって。何が言いたいかって、積み重ねの組織だから去年やったうえに今年も新しいのもやっていきたくなるのも良いんだけど、1つずつちゃんと切っていかないと相対的に負担が重くなる。やりたい、やりたいは言えるけど、やめますが言えるのは上の方だけ。

河　　村：それ、私が今日一番聞きたかったところだったんですけど下田先輩が1月の総会の時にスピーチの時にガラパコス諸島の話をされて、やはり1番人間として重要なのは変化に対応出来るところだと言われたんですけど、私自身、葛藤があってそうは言っても、それって重要な毎年続いてる事業だったりとか、さきの公益もそうなんですけど、大好きな先輩が作ってきた事業もあれば、下田先輩が公益に変えられてというのもあって、大好きな先輩が作ったという思いもあるんですね。例えばドッジですよ。ドッジを無くしたいとかいうつもりはないんですけど。

下田先輩：あれ、そういう事業になりつつあるよね。自分達がやりたい事と変わってきてると思ったらやめるか、やめないかって話だよね。個人的には全然やめても良いと思う。私がやめてやれば良かったって後悔してる。どうせ周年の年で、節目の年で、どうせ愚痴愚痴言われるんだったら、これやめてやれば良かったわって思うくらい。そういう風にやったつもりでもそう思うくらいある。やめるって難しいからね。そういう事を含めてやめるっていうことも大事、周年って。

河　　村：50周年を迎えるに迎えてLOMメンバーにアドバイス頂けますでしょうか。LOMメンバーといっても色々なメンバーがいてそれぞれがやっぱり周年に向かい1歩でも背伸びしてそれによって春日井青年会議所自体が盛り上がる、1つの周年っていうのはチャンスかなと思うのですが、上の方の人はある程度の意識をもって高められると思うんですけど、普通のメンバーの意識もやはり1割、2割ぐっと上げたいと思うんですけどもそうするにあたって何かアドバイスをお願いします。

下田先輩：やっぱり、委員長とか副委員長としてどういう風にしていくかって話になるかな。いくらでもあるんだけど、テーマを作ってとか、皆が好きになれば1歩前に出るはずだからとか、色々言い方があるんだけど、具体的にこうすれば絶対に1歩前に出てくるっていうのは、なかなか難しいんだよな。

伊　　藤：入ってきた時にいろんな先輩を見させて頂いて、すごくかっこいい先輩方がいらっしゃって、僕も入った時に下田先輩もそうですし、他の先輩もかっこいいな、ああいう風になりたいなって思って、どんどんJCにのめり込んでったっていうのが1つあるんですけど果たして今自分達が横並びの委員長含めて、副委員長やフロアのメンバー達にそういう気持ちにさせられているかっていったら、なかなかそういう風になってないんじゃないかっていう風に思ってしまってですね、やっぱりそういうところがもっと春日井青年会議所が良くなって行く為の、皆を巻き込んでいける風に1つだと思ってはいるんですけど、なかなか先輩方々みたいに輝く事が出来ないのかなって。

下田先輩：それはね、本当にそう。私が入った時、ああいう輝いたおっさんになりたいなっていうのは大事だね。メンバーが1歩前に出てくる為の1つの理由になると思う。だからどうする、明日からこうすればいいとか具体的な話ではないから。それやっぱり大きな理由だと思う。人がやっぱり好きでJCが集まる。まちづくりが好きですって人は世の中なかなかいない。やっぱり一緒に

いる人が、このおっさんビシッといくなってところはある。やってみようかなと思う理由として。そこはいろんな社会の仕組みっていうのはそういうのを何十年もかけてやっていくんだけど、60歳位になると業界の長になってとか世の中ってそういう風なんだわ。だけどJCだけは40歳でフィニッシュだから1年でそれがグルグル代わる。そうすると伊藤君みたいに私がそんな風になれてないって必ず思う。それは私も思った。多分みんな思ってる。そこはやりきらないといけない。それがさっき言った持ち場、持ち場を果たさないといけない。私も45周年きたからにはやるしかないから、やっているときはいいかなばっかりですよ。上に行けば行くほどそう思っていってた。聞けば、川島君なんて、あれは良かったですよとか絶対言ってくれるよ、優しいから。精神安定剤だったから。皆言ってくれるんですけど、あんまり立場の人はそういう事を言ったらいけない。孤独に耐えなきゃいけない。孤独に耐えてやるのが役やらせてもらってる勉強代だから。そこをどうしようとか、困ったとか、私も悩んでるとか言ってはいけない。上手くいってないとか、思ってたのと変わってきてるとか、いくらでもあるから。やるメンバーの人が何でとか言っても良いけど、逆の人間は耐えていかないといけない。それを勉強しないとって私は思う。

河　　村：その時、僕は委員長やらせて頂いて、下田先輩とお話しした時にすごいスピーチが上手くて、どうしてそんなに上手いんですかと、「私は、車の中で毎回練習してるんだよ」と。「私、理事長だし人前に出て話す事だけだから、それしか出来ないのにそれをミスったらかっこ悪いよね、だから私は全力やるんだ」と、対外のドッジボールの保護者の人達にもすごいかっこいい事言ってくれて、そこが誇らしいというか、その時の委員長にとって、やっぱり上司がかっこいいと部下もかっこよくなるのかなと。さすがだと見させてもらいました。

下田先輩：しまったなと思って。河村君にそうやって聞かれるとそうやってやってるんだわって言うわな。河村君、内心どう思ってたかわからないけど、ああ一生懸命やってるなと思ってくれてるくらいの話でなんとか、なんとかいいのか悪いのかくらいのところだわな。副理事、監事の立場からするとサポートしなきゃいけないけど、どう手を出していいのか、そもそも手を出していいのか、出すにしろこれやり過ぎだとか、良いのか悪いのかとか、いくらでもそういうのあるよ。だけど伊藤君がおっしゃるようにそういう風にメンバーが1人付いてくるって話があるから、偶々なんだろうけど周年の時に役がもらえた人は普段の年より印象深くなる年でもあるだろうから自分の価値だとか、みんな一生飯食っていくんだから、春日井にからんで、だから皆に印象付ける。生きていく上での自分が見られるいい機会だと思って。JCは40歳で卒業だけど、人間関係全く卒業じゃないから。JC同志、人と成り良しって、そうやって生きていく訳だから、良いとこ悪いとこ含めて、JC的にもそうだけど人に見られてると思って、立場の人は頑張る。なかなか難しいけど、でもそういう事、私も思ったから、徐々に貴方もそういう風になっていくんだから頑張ってやっていかなきゃいけない。それ1番メンバーが1歩前に出る1つかもしれない。前も話したけど、JC入る時に1番最初に昼間に電話かかってきて今日の事業だけどって連絡かかってくるのが何人もいて、嫌いで嫌いで仕方なかった。昼間の時間にJCの事をすいません時間ください言わずにこんな礼儀のない人と一緒にやりたくないわと思ったよ。慣れてきたら、自分も昼間に連絡してたけど、恥ずかしい話なんだけど、私は最後まで今時間ちょっといいとか、後でかけ直そうかとか言ってたつもり。だけどそういうのと一緒で私も入ったばっかりの時にそうやってしっかりとした人間になれるのかなと思いながら、すごい早いテンポでJCはなるから。LOMが周年境に1歩踏み出す1つの起爆剤として改めて掛け声をかけるのも1つかもしれない。

河　　村：委員長とか副委員長をやっている方は、やらないといけないから参加してもらえるんですけど一般のフロアメンバーの方を巻き込んでやっていくことを50周年春日井青年会議所としてやっていきたいと思うんですけど、やはりその巻き込み方が委員長、副委員長以外の人を巻き込む方法が難しいなと思っています。

下田先輩：2つ考え方があるよ。1つは貴方の今いう考え方、上の方が下の方に降りてってなんとか出来るように気持ちを引っ掛けるのも1つ。さっき伊藤君が言うように上の人達が結束して固まってこういうのもやってみたいなって思う下から上がってくる北風作戦。だけどこの話になるとフロアメンバーが来やすいような環境にしようとしか結論はない。そうすると出てくる回数を月に1回とかにして、少なくして出てきやすいようにしよう。これが1つ。後何回も連絡して来てもらおう。来たらメリットがあるような状況にしようとかいう議論もよくある。仕事の話を月1回飲み会でしようとか、そういうのを私らの現役の時にやってる委員会もあった。そういう方向にいくのも1つ。そういうやり方もあるとは思うんだけど、そのやり方も何年もやってなかなか上手くいかないって結論になってるんじゃないかなって感じに思うけどね。だって入ってくる人達を出来るだけ沢山入れようって発想で来てるでしょ。そこを引っ張るにしてもなかなか引っ張りにくい人達なわけで、春日井に縁も所縁もない、そもそも夜仕事があって来にくいとか、昔に比べてなかなか引っ張って来にくい人達にも入ってもらってる現状があると思う。現実的に来てもらうのに昔よりも手間が掛かるって言う言い方すると、語弊があるけど、それはあると思う。そういう事ないかな。今どういう状況か知らないけど私は青年会議所卒業する時の2014年の時は出席率の話もあったし、今後の話もあったけど、気にしない方がいい。それよりも役員のメンバーが一生懸命活動やって、良いものだっていう事は言わなきゃいけないし、自然と付いてくるぐらいの気持ちで頑張ればいいんじゃないのって話をした覚えあるな。もっとJCってどうなんだ、JCってどうなんだ、素晴らし

いもんなんだ、こういう風に考えるといいんじゃないかっていうのをコアなメンバーがもっともっと深く考えて引っ張っていけばいいんじゃないかって発想もある。だからと言って同じ 10 万円払っているんだから、皆に同じように良い経験してもらわないといけないのが前提だから。なかなかその答えは難しい。誰か良い事いってないの。なるほどこうすれば一般メンバーって巻き込めるかもなって話なかったの。

河　　村：ごめんなさい、ないですって言うとあれなんですけど特効薬がないです。

下田先輩：私は、1 つは試しって言ったら語弊があるけど、河村君が委員長やった時の会員拡大のメンバーを 6 人にした覚えがある。それは何でかって言うと前の年まで会員拡大委員会活動するでしょ、沢山の人に入ってもらうのが大事なんだけど、拡大メンバーの動きが見えないとか、そういう議論は必ず出る。委員長しかやってないとか、副委員長しかやってないとか、メンバーがもっとだとか、必ずそういう議論が出る訳毎年。委員長が大体毎年、一生懸命やっている訳だけどフロアメンバーの活動がどうとか、拡大委員のやってる姿がみえんとか、愚痴愚痴やるわけ。私はいらんってそんなものは。皆入れたいって思ってる訳だから、それを確かめるような。それでも河村君が上手にやってくれたのが 1 番の理由だけど、メンバーは多くなくてもいいから、しっかりとしたメンバーを集めてもらって。そういう議論なし。今年の拡大委員はきっちりやってる。それに答える図式でいくっていう。小さい方がまとまりやすい組織って。目が届くから、そういうのも 1 つだな。河村君の言い方が上手だから大抵 6 人まとまって上手にやってくれた。

河　　村：拡大が成功させて頂いたのは 45 周年で拡大がすごくやりやすくて、下田理事長が直で前面に言って頂いて、私が入れて欲しいって言ってることをお前たち動けってダイレクトに言ってくれたし、その拡大が頑張ってるのは絶対頑張ってるんだから、お前たち答え出さなきゃいかんよっていう雰囲気がその通りで、ただやっぱり歴代拡大委員長の話を聞くと新しい拡大委員長に背中をみせなかんぞ、靴底減らして、体力使って、動かなかんわ。大変だぞ、っていうんですけど、そういうのがなかったのでそれがすごいやりやすかったですね。逆に下田先輩、そういうので拡大びいきしてるんじゃないかとか、副理事長に言われて大変だったんじゃないかなと思ってました。

下田先輩：あるけど、どうってことない。気にしてやらんか、言われてもやるか、どっちかだわな、何でもそう。

川　　村：45 周年って意識されてましたか。45 周年だからっていうのをものすごい意識されて采配とかを考えていったのか、やっぱり自分が理事長としてやりたい事を皆にやってもらいたいっていうだけなのか、45 周年を後から付けてくる感じなのか、45 周年だったら私はこうするぞみたいな意識的に 45 周年っていうのをかなり意識されたのか、されてないのか、どうかなと思って。ちょっと今その 50 周年っていうのが頭から離れないというか、50 周年実行委員の室なので仕方ないんですけど、その辺、窮屈というか、どうしていったらいいのかっていうのがなかなか見えてこないというかその辺が意識し過ぎてる部分も多いのかとか、そういう悩みとかっていうのが 45 周年の時もどういう感じで 45 周年っていうのを、例えば理事長としての意識付けもそうですし、皆に 45 周年だから頼むよっていうのを言い続けてたのかなとか、やっぱり数字として大事なのかな、その辺はどのくらいの意識でやられてたのかなと思いまして。

下田先輩：青年会議所の活動だから周年を意識したかどうかって話もあるんだけど、50 周年自体に何があるとすると、事実として式典があるでしょ、記念事業もやるでしょ、40 周年の時はもう 1 つあって、記念講演っていうのをやってもらった。40 周年の実行委員だったから、記念事業系を 2 つやってる。45 周年の時は 1 つしかやってない。記念講演はやってないから。そういう図式。何が言いたいかっていうと、例えば 40 周年だったら、式典があって、記念事業があって、記念講演があって、尚且つ LOM メンバーが周年っていうのを意識するために連絡調整会議じゃないけど、そういうのもあったよ。周年の事だけを会議する理事会みたいなのもあった。何が言いたいかっていうと、周年を意識せずにやるっていうのがちょっと難しい、そういう仕組みになってるから。事業が 1 つか 2 つかはだいぶ大きな差があるけど、もう出てくる議案のテンポといい、会議の設営も含めて、50 周年の来季に入ってる人だったらそれを意識して JC の周年というのをどう最大限いくかっていう、それしかないんじゃないのかな。あんまり、意識せずには出来ないはずだと、仕組みが。別に何かの例会とかだされる訳ではないから、それじゃないと来年の 50 周年の特別委員会が 9 月例会担当します。そういう話だったらいいけど 1 つの年だと思って、50 ってアクセントだと思って頑張ります、考えます。これだったらいいけど、そういう仕組みじゃないから、何となく私が思うに、いくしかないんじゃないかな。50 周年特別な事だから 50 周年を思いっきり意識する、全国の 50 周年事業を調べて色々考える。それしかない。あなたは、ケツを押す。避けては通れないと思う。来年記念講演やるの？。

川　　村：記念講演は聞いてないんですけど、式典は 6 月に市民会館に、9 月に周年事業をやらせてもらう予定なんですけど、2 日間で色々踏まえたものをやろうというのがあって、その中に記念講演的なものも含めて 2 日間丸々、春日井のあちらこちらでやろうかなっていうのが一応なんとなく今思っているので。

下田先輩：もう一つ思ってたのが悪かった点があればじゃないんだけど、式典の事を思い出したんだけど、引っ張っていく人達は特にだけど、周年の為の式典を勝川プラザでやるのも良いんだけど、5 の周年の時、32LOM よんでなくて、私らの周年の時は、東海と一緒だったから、東海も 5 だから 32LOM よんでなくて、そういうのもあったから 5 の時は普通エリアだけだから呼ばなかった。だけど会長出てたから呼ぼうかどうか迷ったりもし

たの。皆に呼んで派手にやりたがってるなって思われるのが嫌だと思った。皆が一生懸命やっている中で意気地がなかった私自身の。どう思われてもいい、せっかくの会長出してる年だし、節目だし私自身もきっちりやってるんだから皆に見てもらうんだ、その時の春日井青年会議所の理事長のあれが出て、対面するわけだから私に自信があれば沢山来てもらえばよかった。踏み切れなかった。情けなかった。後からもっと呼んどけばよかったと思った。そういう事ってたぶん得てしてあると思う。ここまででいいんじゃないかとか、ちょっと私はそこは後悔してる。いけばよかったと思って。

河　　村：下田先輩ってすごい人だと思っているメンバーが相当いまして、その方が色々事業を見られてて、これすごい考えて、知恵があって良かったなっていう事業ってベスト1ってありましたか。

下田先輩：日本の褒賞を取った事業を1つあったんだけどネットで見れるからああいうの必ず見た方がいいよ。規模もいいんだけど、一知恵、二知恵JCらしいなとか、他団体を絡めてるとか、人に参加してもらう仕掛けとか1つアクセント効いてるなっていうのが結構あるし、これを考えた人頭いいなとか、これは上手くいくだろうなとか仕掛けしてあるやつがあるんだよね。JCの褒賞ってそういう所が余すところなく書いてあるからあれをよく勉強するといいよ。春日井LOMは規模でいうと、あなたの兄がやった100㎞ウォークもすごかったし、伊藤君がやったミライオンも立派だし皆規模的にはしっかりやってるから他の見本になるようなあれだと思うけど、良い事業っていうのはポイントがあるもんだね。

一　　同：本日は、ありがとうございました。

2. 市民向け対外事業についてのアンケート

平成 29 年 4 月～ 9 月に行いました対外事業に参加頂いた方を対象として、実際に（公社）春日井青年会議所の事業に対してどのようなイメージ、考え、希望を持たれているかを聞き取り調査を行いました。

アンケート結果

①　（公社）春日井青年会議所を知っていますか？

1．知っている　53 名（77%）　　2．知らない　16 名（23%）

②　（公社）春日井青年会議所が行っている事業で知っているものはありますか？

1．知っている　34 名（52%）　　2．知らない　32 名（48%）

知っている方は、知っている事業を挙げてください。

キャンプ　11 名　　ドッジボール　11 名　　わんぱく相撲　9 名
どろんこ　5 名　　ＪＣサンデースクール　5 名　　わいわいカーニバル　3 名
夢・無限　2 名　　春日井まつり　2 名　　大縄跳び大会　1 名　　落合公園でいろいろ　1 名

③　わいわいカーニバルを始めたのが、（公社）春日井青年会議所ということを知っていますか？

1．知っている　15 名（22%）　　2．知らない　52 名（78%）

④　わんぱく相撲の参加者で、大相撲の力士になった人がいることをご存知ですか？

1．知っている　7 名（10%）　　2．知らない　61 名（90%）

⑤　（公社）春日井青年会議所は、事業を行うことにより春日井のまちを明るく豊かにすることを目的として活動する団体です。今後もいろいろな事業を展開していきたいと思いますが、その対象はどのような世代を対象にするのがいいと思いますか？（複数回答可）

1．小学生未満（13 名）　2．小学生（57 名）　3．中学生（27 名）　4．高校生（13 名）
5．大学生（4 名）　6．20 代（8 名）　7．30 代（7 名）　8．40 代～ 60 代（2 名）　9．60 代以上（3 名）

⑥　（公社）春日井青年会議所は、事業を行うことにより春日井のまちを明るく豊かにすることを目的として活動する団体です。今後もいろいろな事業を展開していきたいと思いますが、その前提として教えてください。

1．あなたが思う春日井のまちの素晴らしいところを教えてください。

自然が多い（12 名）　住みやすい（9 名）　公園が多い（8 名）
交通の便（6 名）　子育てがしやすい（6 名）　人が温かい（3 名）　プールが多い（2 名）
災害ない、サボテン、ママの文化祭、公共施設充実、地元民の団結力、書道（以上、各 1 名）

2．あなたが思う春日井のまちの問題点を教えてください。

子育てにもっと取り組んでほしい（3 名）　インパクトなし（2 名）　渋滞（2 名）
外部からだと馴染みにくい（2 名）　車ないと不便（2 名）　治安悪い（2 名）
公園のプールに駐車場なし、体力づくりへの取り組み弱い、
夜暗い、人気スポットなし、公園でボール遊び出来ない、学校少ない、
公共施設使いにくい、地域が縦に長くまとまりがない、春日井駅周辺がいまいち（以上、各 1 名）

3. 第６次中期ビジョン総括

第６次中期ビジョン総括

第１　はじめに

春日井青年会議所は今年で創立 49 年を迎え、来年、2018 年には 50 周年の節目を迎えます。春日井青年会議所の運動は、他の青年会議所と同様「明るい豊かな社会の実現」という国際青年会議所が掲げる究極の目的のもと行っていますが、そのなかで時代や環境は常に変化するものであることを念頭におき、また、私たちが住み暮らすこの「春日井」というまちにフォーカスを当てた、春日井青年会議所独自の運動を追求し展開していかなければなりません。

そして、単年度制度という青年会議所の伝統と駆け抜けるように過ぎ去ってしまう日々の中で、効果的な青年会議所運動を展開するには、マイルストーンとしての目標を掲げることが必須であるとの考えのもと、先輩諸兄の智慧を結集し、春日井青年会議所は今まで４つの長期ビジョンと６つの中期ビジョンを策定してきました。

50 周年を次年度に控える本年度は、45 周年時に策定された第４次長期ビジョンを達成するための第６次中期ビジョンの最終年度であり、その総括を行うことが、これから続く第 7 次中期ビジョンへの手がかりとなるため、ここに第６次中期ビジョンの総括を記すこととしました。

第２　第６次中期ビジョンについて

１　第４次長期ビジョン

第６次中期ビジョンは第４次長期ビジョンを達成するために策定されたものであるため、まずは第４次長期ビジョンがどのようなものであるかを知っておく必要があります。

(1)「春日井Ｃ３（シーキューブプロジェクト）　～世代間共和都市の創造と発信～」

第 4 次長期ビジョンは、春日井青年会議所が架け橋となることで、世代や地域を超えた多種多様な人びとが、ただ繋がるだけでなく「心を合わせ仲よくする」という共和状態にまで昇華した「世代間共和都市」をつくりだし、ひとり一人が主役となり直面する問題を自分たちで解決する積極的な市民であふれるまちづくりを目標とした、３つの「Ｃ」を柱としたビジョンです。

(2)「Ｃｈａｒａｃｔｅｒ（登場人物）＝ひとづくり」

一つ目の「Ｃ」は「Ｃｈａｒａｃｔｅｒ（キャラクター）」です。誰もが自分が暮らすまちにおいて主役になりうるひとづくりを目標に、①まちに求められていることを的確に把握すること、②主役・引き立たせ役の役割分担を行い、それを譲り合い、あるいは引き受ける勇気の醸成、③割り当てられた役割を全うできる能力の育成を目指しました。

これを達成するため、具体的に春日井青年会議所は、

ア　まちが抱える課題を春日井青年会議所と市民が一体となって考える場と、そこに対する深い理解が可能となる継続的な意識形成

イ　自己の都合のみを優先するのではなく「公」の意識を育み、それを拡大して行く事業の構築

ウ　社会起業家にもなりうるような、まちの主役となれる人材育成とその為に必要な能力を身につけることのできる機会の創出

を課題とし、取り組んでいくこととしました。

(3)「Ｃｏｎｎｅｃｔ（つながり）＝まちづくり」

二つ目の「Ｃ」は「Ｃｏｎｎｅｃｔ（コネクト）」です。世代間交流を積極的に促すことで、各世代がもつ課題を他世代が持つ強みで解決するという世代を超えたつながりが大きな力になることを実感し、さらには各世代の想いも繋げるまちづくりを目指しました。

これを達成するため、具体的に春日井青年会議所は、

ア　各世代のつながりにより、おおきな力が生まれることを実感できるまちづくり。

イ　シニア層は、青少年や壮年層を「自らが歩んできた道」と受け入れ、壮年層はシニア層が「自らの行く末」と認め、青少年は先輩諸兄の築き上げてきた歴史と伝統を再解釈することで「自らの立ち位置」を知り、そしてこれからの行く末に想いを馳せるといった、各世代同士の相互理解のために濃密なコミュニケーションの形成

ウ　各世代の対話を促進し、想いを共有することによる、つながりの共和への昇華

を課題として取り組んでいくこととしました。

(4)「Ｃｏｍｍｉｔ（担いを果たす）＝組織づくり」

三つ目の「Ｃ」は「Ｃｏｍｍｉｔ（コミット）」です。日本青年会議所を初めとする地区・ブロック協議会、他の各地青年会議所との交流を通じて得られた経験知を、春日井青年会議所の視点で取り入れ浸透させることで、各メンバーの満足度増加と事業の効率的な遂行を促し、より活発な組織づくりを目指しました。

これを達成するため、具体的に春日井青年会議所は、

ア　地域で必要とする事象と日本ＪＣの魅力を融合した組織の在り方

イ　日本ＪＣや地区協議会、愛知ブロック協議会、尾張東５ＪＣ(現６ＪＣ）のつながりの中でしか得られない魅力の再発見

ウ　ＪＣ三信条を基本としたＪＣ運動の本分を理解することによる組織力の向上

を課題として取り組んでいくこととしました。

２　第６次中期ビジョン
「チャレンジＡＢＣ～挑戦者たちへ！～」

第6次中期ビジョンは上記の第4次長期ビジョンを達成するため､長期ビジョンの3つの柱であった｢ひとづくり｣｢まちづくり｣「組織づくり」を、失敗を恐れず、叡智と勇気と情熱を持って果敢に挑戦するというチャレンジ精神を軸として展開したビジョンです。

(1)「Ａｃｔｉｏｎ(積極的な行動)＝ひとづくり」

「A」は「Ａｃｔｉｏｎ(アクション)」です。明るい豊かな社会を創造しようとしたとき、現状に満足せず、明確な目標達成や課題解決のために失敗を恐れずチャレンジ精神旺盛な行動力を身につけたひとづくりを目指しました。

そのために、春日井青年会議所として行うべきは、

ア　新しい価値観や新しい文化を創出するための事業の構築

イ　自他の差を受け入れることのできる心を持った個人と社会の育成

ウ　「挑戦」することの価値と挑むことの楽しさの理解とその行動力の発信

であると考え、取り組んできました。

(2)「Ｂａｓｅ(挑戦できる土台)＝まちづくり」

「B」は「Ｂａｓｅ(ベース)」です。春日井青年会議所と同じ想いを持つ団体や市民の方々へ、春日井青年会議所が行うチャレンジ精神に満ちた活動をその想いと共に協働し伝播することによって、チャレンジ精神旺盛な人たちが自然と集まるまちづくりを目指しました。

そのために、春日井青年会議所として行うべきは、

ア　互いに交流の少ない部分に焦点をあて、新たな市民や団体の交流を生み出すまちづくり。

イ　まちづくりに関わることの楽しさ、そこから得られる学びの大切さを発信することで、新たな関心が広がるネットワークの構築

ウ　まちづくりを行う団体やグループの育成

であると考え、取り組んできました。

(3)「Ｃｏｎｔｅｎｔ(高い満足度)＝組織づくり」

「C」は「Ｃｏｎｔｅｎｔ(コンテント)」です。春日井青年会議所メンバー同士が強い絆で結ばれ、メンバー自身が青年会議所活動に高い満足度を得ることによって、青年会議所活動に携わる誰しもが幸福になれるような組織づくりを目指しました。

そのために、春日井青年会議所として行うべきは、

ア　ＬＯＭメンバー同士が、互いに互いを深く知ることにより、組織の付加価値を高める

イ　課題をＬＯＭメンバー全員が考える意識の向上

ウ　ＪＡＹＣＥＥとしての誇りを継ぐためのブランディングやそれを自らの言葉で語る強さ

であると考え、取り組んできました。

第３　第６次中期ビジョンの総括

１　第６次中期ビジョンへのアプローチ

以上で見てきたように､第４次長期ビジョンである､3つの「C」を柱とした「春日井C3(シーキューブプロジェクト)～世代間共和都市の創造と発信～」を達成するために､第４次長期ビジョンの「ひとづくり」「まちづくり」「組織づくり」に対応した、第６次中期ビジョン「チャレンジＡＢＣ～挑戦者たちへ！～」があり、この５年で春日井青年会議所が第６次中期ビジョンをどのように実践してきたかを振り返り、その成果がいかなるものであったかを総括します。

2 「チャレンジＡＢＣ～挑戦者たちへ！～」の実践

(1)「Ａｃｔｉｏｎ(積極的な行動)＝ひとづくり」の実践

春日井青年会議所が、市民に対して、事業としてキャンプや音楽祭等を通じて非日常的な体験を提供したり、独特の道を歩むアーティストからメッセージを届けることでチャレンジ精神旺盛な行動力あるひとづくりをしてきました。また、その挑戦により目標達成・課題解決するための能力を身につけるため、春日井青年会議所が調査・研究した結果の発表や著名人によるフォーラムによって、我々日本人に伝承されてきた和の道徳心を改めて考え直すとともに、そこから新現代に必要とされる新しい価値の提供も行ってきました。

(2)「Ｂａｓｅ(挑戦できる土台)＝まちづくり」の実践

春日井に存在する各種の団体と交流したり、春日井青年会議所が中心となり各種団体と共に協議会を開催して意見・情報交換することで、防災などのテーマのもとに春日井の「まち」を想う新たなネットワークを構築しました。また、春日井に住み暮らす人々に対しても、活躍の場を春日井青年会議所が用意することで「まち」の創造に参画する機会を提供するまちづくりを行ってきました。

(3)「Ｃｏｎｔｅｎｔ(高い満足度)＝組織づくり」

メンバー同士の交流をもたらす事業はもちろんのこと、近年の青年会議所の課題である会員拡大についてメンバーの意識共有を行う事業を行ったり、(公社) 日本青年会議所からトレーナーを招きＪＣプログラムを行ったり、メンバー自身の能力向上や青年会議所に対する造詣を深める組織づくりを行ってきました。

3 まとめ

上記のように、春日井青年会議所は第６次中期ビジョンを実践する運動をこの４年間で展開して来ました。第６次中期ビジョンも「ひとづくり」「まちづくり」「組織づくり」という 3 つの観点から春日井青年会議所の運動を牽引して来ましたが、その根底にあるのはやはり「チャレンジ＝挑戦すること」であったと思います。

すなわち、この 4 年間で春日井青年会議所自身が、公益法人格の取得、国際青年会議所（ＪＣＩ）や（公社）日本青年会議所等の要職への出向者の輩出、12 年振りの「とうかい号」主管など、ＬＯＭにとってインパクトの大きなことに挑戦してきたということです。このようなインパクトの大きなことは、劇的にメンバーの意識向上や結束の強化を可能としますが、ともすると、意識の低下やＬＯＭの分断を招く危険もあるため、引き受けるか否かにはどちらの選択もありうることだと思います。しかし、春日井青年会議所は、この第 6 次中期ビジョンを発表した時から、失敗を恐れずに果敢に挑戦する「ひとづくり」「まちづくり」「組織づくり」を行うため、まずは自らその姿勢を見せることが重要であるという信念のもと、挑戦することを第一に考え活動して来たのです。

この挑戦の結果、成功したこともあれば反省しなければならないことも多々あります。しかし、その挑戦の結果得られた経験はこの先の春日井青年会議所の運動にとって必要不可欠なものであることは間違いなく、このような経験を得られたことが第６次中期ビジョンの最も重要な成果であるといえるでしょう。

第４ おわりに

今回第６次中期ビジョンの総括をする際、この４年間の事業や理事長所信等を再度振り返る機会がありました。その中で、第４次長期ビジョンや第６次中期ビジョンに基づいて実践されていると感じられる場面が多々ありました。

しかしながら、多くのメンバーはそのようなことに気づいておらず、それに気づく契機さえないのが現状と言わざるを得ません。ビジョンとは何であるかと聞かれた時に、冒頭で述べた通り、それは効果的な青年会議所運動を行うためのマイルストーンであり、先輩諸兄の智慧の賜物であると考えます。さすれば、メンバー全員がこのビジョンを理解し、それに沿った活動をしていくことが、「明るい豊かな社会の実現」への唯一の近道ではないでしょうか。

次の第７次中期ビジョンはこれから策定されますが、第４次長期ビジョンと合わせて、ビジョンが（公社）春日井青年会議所メンバー全員に浸透しそれを踏まえた青年会議所運動が展開されることを願い、第 6 次中期ビジョンの総括とさせて頂きます。

以上

4. 編集後記

今回、「50 周年に向けての調査・研究」として、春日井青年会議所 49 年の歩みを振り返る中で、ＪＣルームに保管される多くの資料を確認させて頂きました。資料の行間から垣間見える先輩諸兄の熱き魂は、この 49 年間脈々と積み重ねられ、今の自分たちの運動の礎となっていることを改めて強く感じました。そして、50 年の節目を迎えるにあたって今のわたしたちに必要な事は、先達からの学びをしっかりと受け止め、未来への方向を見定めて上で、未来の後輩たちのために新たな魂を積み上げていくことだと思います。50 周年を迎える次年度が、未来の春日井を創造する最高の契機となることに、この調査・研究がその一助となるとすればこれ以上の喜びはありません。

最後になりましたが、この調査研究にご協力いただきました先輩諸兄、そして、調査研究に携わって下さった委員会メンバーの皆さん、支えて頂きました河村副理事長に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

平成 29 年 9 月吉日

「とうかい号」推進実行委員会
委員長　伊　藤　　宏

公益社団法人春日井青年会議所 2017 年度
「とうかい号」支援室
担当副理事長　河　村　勇　祐

「とうかい号」推進実行委員会

委 員 長	伊　藤　　宏
副委員長	川　島　友　樹
副委員長	大　島　　淳
副委員長	中　村　祐　介
委　　員	有　賀　智　司
委　　員	加　藤　貴　章
委　　員	加　藤　佑　輝
委　　員	河　尻　久　静
委　　員	川　村　裕　司
委　　員	國　井　恵　介
委　　員	佐　伯　貴　則
委　　員	長　縄　健　一
委　　員	松　原　悠　太

協力：「とうかい号」特別委員会
副委員長　齊　藤　洋　大

JCI™